

立科町文化財調査報告書第3集

1994

龍田遺跡

——芦田氏菩提寺光德寺跡の調査——

平成6年3月

長野県北佐久郡立科町教育委員会

龍田遺跡

——芦川氏菩提寺光徳寺跡の調査——

平成6年3月

長野県北佐久郡立科町教育委員会

序

立科町教育委員会

教育長 中島 正憲

文化遺産を大切に保存し後世に引継いで行くことは、私たちの重要な任務であります。

戦後、我が国の経済は奇跡的な復興を成しとげましたが、特に昭和30年代後半よりの経済優先主義は、山林も農地も、都会も農村も、開発の旋音高く変貌を続けました。

昭和24年法隆寺の壁画が焼損するという不幸な事件を契機として、昭和25年従前の法制度を拡充整備し、民俗文化財、埋蔵文化財、無形文化財等を保護対象に加えて、今日の文化財保護法が成立しました。

この法改正は誠に当を得たものであったと思います。もしも、この法整備を行わなければ、私たちの祖先が營々と築きあげた尊い文化遺産は腐朽、破損し、或いは喪失し、後世に引継ぐはおろか、永久にいくつかが失われてしまつかもしません。

さて、現在の立科町に人が住みついた年代は定かではありませんが、町内に埋蔵文化財の包蔵地が180箇所確認されております。

平成元年、県営圃場整備事業の実施に伴い古町遺跡群の内、大庭地籍を緊急発掘調査致しました。その結果、縄文前期、中期の住居跡、更に下って古墳時代の住居・倉庫跡をはじめ、石器・土器・装飾品等が数多く出土し、大規模な集落跡であることが確認されました。平成3年、これらを復元保存し、「大庭遺跡公園」の完成をみたのであります。

統いて、古町遺跡群の南端、龍田地籍の跡場に着手したところ、地元の伝承通り遺構が発見され、再び緊急発掘調査を実施致しました。この調査結果をここに『龍田遺跡発掘調査報告書』としてご報告するものであります。

昨今、各地に於いて遺跡の発掘調査が行われ、日本の歴史がより実証的に解明されつつあることは誠に喜ばしい限りであります。歴史学、考古学は大変地味な学問であり、研究者の情熱と努力が必要ですが、この調査報告がより多くの皆様に伝えられ、文化財保護の重要性が理解されると共に立科町の新しい歴史発見に役立つことを望んで止みません。

終わりに今回の発掘調査を担当されました島田恵子先生をはじめ、調査団の方々、佐久地方事務所土地改良課、圃場整備実行委員会、地元関係者のご理解とご協力に対し深く感謝の意を表す次第です。

平成6年（1994）3月2日

例　言　・　凡　例

- 1 本書は、長野県北佐久郡立科町大字芦田龍田385-1・385-4番地に所在する龍田遺跡光徳寺跡の調査報告書である。
- 2 本調査は、平成3年度開場整備実施中に伝承の寺院跡とおもわれる遺構が12月末に発見されたため、急遽、事業主体者の佐久地方事務所土地改良課、立科町農政課の協力を得て、立科町教育委員会が平成4年1月6日から実施した。
- 3 本調査は、地元の文化財保護委員会副会長の中村一朗を団長とし、長野県考古学会員、佐久考古学会員を調査員として実施した。
- 4 本書の執筆は調査関係者が分担して執筆し、文責は文末に明記してある。
- 5 本書に掲載した遺構の写真は島田恵子が撮影したものを使用し、出土遺物の写真は二科会写真部長野支部の島山あきまさ氏に御協力いただいた。
- 6 本書の編集は島田が行い、中村一朗団長が校閲、監修した。
- 7 本遺跡から出土した資料は、立科町教育委員会の責任下に保管されている。
- 8 本書における遺構実測図の縮尺は、80分の1、遺物は、土器・陶器・銅製品2分の1、五輪塔4分の1に統一し、各実測図に縮尺を明記してある。
- 9 図版中の遺物の縮尺は、土器・陶器・銅製品は約2分の1、五輪塔は3分の1とした。

本調査にあたり、開場整備工事請負業者の皆様方に御協力いただき厚く御礼申し上げます。また、地元古河の高尾照子、荻原トク子氏にはお茶の接待にあざかり寒い中を心あたたまる想いでした。感謝申し上げます。
尚、報告書作成につき長野県埋蔵文化財センターの市川隆之氏にご教示いただきました。記してお礼申し上げます。

本文目次

序	立科町教育長 中島 正恵
例言・凡例	
本文目次・付表目次・挿図目次	
第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査に至る動機	1
第2節 発掘調査の概要	1
第3節 発掘調査日誌	2
第2章 遺跡の環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 考古学的環境	5
第3節 歴史的環境	9
第3章 層序	11
第4章 遺構と遺物	12
1 遺構	12
2 遺物	14
(1) 土師質皿形土器他	14
(2) 内耳土器他	16
(3) 陶器	16
(4) 古銭	18
(5) 銅製品	19
(6) 五輪塔	19
第5章 考察	26
第1節 遺構	26
第2節 遺物	27
第3節 光徳寺と芦田氏	29

挿図目次

第1図 周辺遺跡一覧表	6
第2図 龍田遺跡地形図及び発掘区設定図	10
第3図 龍田遺跡層序模式図	11
第4図 検出遺構全体図	12
第5図 建物址跡尖測図	13
第6図 土師質小皿他尖測図	15
第7図 土師質大皿尖測図	15

第8図 内耳土器他実測図	17
第9図 中世陶器実測図	18
第10図 近世陶器実測図	18
第11図 古銭折影図	18
第12図 銅製品実測図	19
第13図 五輪塔空・風輪実測図No.1	20
第14図 五輪塔空・風輪実測図No.2	21
第15図 五輪塔火輪他実測図	22
第16図 五輪塔水輪実測図	23
第17図 五輪塔水輪・地輪実測図	24
第18図 建物址跡遺物出土地点実測図	25

付 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	7
第2表 上部質皿形土器一覧表	16
第3表 内耳土器一覧表	17
第4表 古銭一覧表	19

図 版 目 次

図版 1	1. 龍田遺跡北東側に芦田城を望む	2. 建物址跡全景、手前庫裡跡
図版 2	1・2. 建物址跡全景	
図版 3	1. 五輪塔・銅製品出土状態	
図版 4	1. 土質質小皿・大皿および炭化材	
図版 5	1. 内面墨色土器器・須恵器・内耳土器・中世・近世陶器類	
図版 6	1. 五輪塔の火輪・地輪他	
図版 7	1. 五輪塔の水輪・空・風輪	
図版 8	1. 五輪塔の水輪、空・風輪	
図版 9	1. 五輪塔の空・風輪	2. 銅製品
図版10	1. 藤岡市の光徳寺全景	
図版11	1. 藤岡市の光徳寺本堂内	2. 天正18年松平右衛門太夫康真が藤岡移封された時に居城した芦田城跡
図版12	1. 藤岡市の光徳寺に記録されている芦田氏歴代の法名ならびに開山～現在までの歴代僧侶の記録	

第1章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機

龍田遺跡は、立科町芦田地区の南側にあり、芦田川に添い南北に伸びる細長い古町遺跡群の南端に位置する遺跡である。

この古町遺跡群は、昭和62年より始まった県営圃場整備事業番屋地区第5工区の地区内にあり、平成元年度には、関係機関各位の協力を得、大庭地区的発掘調査が実施された経過がある。

龍田地籍は、現在水田地帯である。光徳寺は、文明年間（1469年～1486年）芦田城二代日城主芦田右衛門太郎光玄が父芦田備前守光徳の追福のため建立したもので、寺号も父の法号とした寺である。当時は、龍田地籍に建立されていたが正徳年間（1711～1715年）に芦田川の水害を避けるため現在の西側山腹に再建されたと地元に伝承されている。

平成3年度圃場整備実施中にこの地籍より寺院跡と思われる遺構が発見され、急きょ事業主体である長野県佐久地方事務所土地改良課、立科町農政課、立科町教育委員会で協議・検討を加えた結果、圃場整備事業を一時中断し、遺跡範囲確認調査を行い記録保存を図るとともに、調査あとは埋土により現状保存することに決定した。

（事務局）

第2節 発掘調査の概要

○遺跡名 龍田遺跡

○所在地 長野県北佐久郡立科町人字芦田字龍田385-1・385-4番地

○発掘期間 平成3年12月26日～平成4年1月23日

○調査機関 立科町教育委員会

○調査に関する事務局

立野 久治 立科町教育委員会教育長

中島 正志 同

堀 利一 立科町教育委員会教育次長

六川 孝則 立科町教育委員事務局係長

両角 幸男 同

笹井 恒翁 立科町教育委員事務局主任

竹重 和明 立科町教育委員事務局主事

○発掘調査団組織

団長 中村 一朗 立科町文化財保護委員会副会長

担当者 島田 恵子 長野県考古学会員

調査員 井出 正義、佐藤 敏、倉見 渡、佐々木 春蔵（以上長野県考古学会員・佐久考古学会員）

補助調査員 上原 鑑三

地形・地質・石質指導 伴野 拓也（中込小学校教諭）

第3節 発掘調査日誌

○平成3年12月26日（木） 本日は、古町屋敷遺跡の試掘調査を行う。終了後、六川係長さんが現在進行中である補場整備の工事現場の龍田遺跡から、炭化材および焼土が認められるので見てほしい。との依頼があり現地を踏査する。

炭化材と焼土の散布はところどころに認められ、火災にあった様相を呈している。さらに、土師器、陶器、銅製品を表面採集することができて、建物の跡である可能性が強く感じられた。試掘調査では付近から五輪塔が多数出土しているという。伝承にある光徳寺跡が予想されることから、年明け早々に調査することにして係長さんに段取りをお願いする。

○平成4年1月6日（月） 寒中なのでどれだけの調査が出来るか不安ではあったが、お正月早々から調査員の方々に無理をお願いして出ていただく。補場整備の工事施工者さんに協力してもらいバックホーで周辺の試掘と建物跡の周りに積んでいた土を少し離れた地点へ移動する。周辺からは遺構の存在、遺物の出土がなかったので、調査地点を建物跡へしぶることにする。夕方雪が散らつく。

○平成4年1月20日（火） 今年は雪が定期的に降るのでなかなか調査する日がなく、工事の都合もあるので本日から本格的に取り組むことにする。シートの上には雪がとけて氷となっていたり、地表面は凍っており作業はきつい。炭化材や焼土も凍っていてとけるのを待って精査したが粉々になってしまった。

1月21日（水） 本日は建物の範囲をほぼ確認することができた。灰色の粘土を張った幅60cmの部分を追っていくと建物に沿っていることが分り、この状態のところを額縁に精査すると東西側16m、南北側9.3mの建物であることが想定された。炭化材、焼土もこの部分に集中している。なんとか見通しがついてきた。

1月22日（木） 建物跡周囲の掘り下げを行なう。朝は凍った土を剥ぐのに苦労し、午後はそれがとけてグチャグチャにぬかるる。そのぬかるるみに足をとられて身動きも自由にできない。寒中の調査は大変である。細部にわたる精査は凍った土に邪魔されバリバリ剝げてしまい不可能となる。情けない。

1月23日（金） 本日は建物跡の南西側を精査する。カマド跡らしい部分が見つかり庫裡である可能性がでてきた。相変わらず作業はやりにくい。夕方から雪が散らつく。

1月29日（水） 雪が周囲に積っている状態の中で本日で終了するために作業にかかる。先ず写真がとれる状態に清掃する。ぬかる土をきれいに取り除く作業が午後までかかる。2時までに写真撮影を終了し実測にかかる。夕方暗くなるまで全員で協力してどうにか遺物取り上げまで終了することができた。本日はあたたかな一日であったため助かった。

今まで伝承の中にあった光徳寺の存在が、応急的な調査ではあったが破壊することなく無事記録にとどめることができて、立科町の歴史解明に一石を投じる事となった。

○平成5年8月～平成6年3月 遺物整理・実測・トレース、図面整理・トレース、原稿執筆・編集、図版作成、校正、報告書刊行。
（島田 恵子）

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

立科町は蓼科山の西麓から北麓にかけ南北に20kmに細長く広がる地域である。この地域を地形的に眺めると火山である蓼科山からの溶岩等の噴出岩で形成される裾野に広がる町の南部と湖成堆積物からなる台地上にある町の北部の二地形に分けることができる。

今回発掘された龍田遺跡はこの二地形のうち、湖成堆積物上にあるもの、湖成堆積物の構造を観察すると龍田遺跡周辺の堆積物の多くは蓼科山火山の噴出物の泥流性堆積物から構成されている。このことから、龍田遺跡の地理的環境としては町の北部に広がる湖成堆積物と南部を構成している火山噴出物地域との接点として考えることができる。

地質の概要

立科町のある台地の構成層は概略的にみると「小諸層群」といわれている。小諸層群は第三紀後半の陸性堆積物である「小川層」「別所層」の上位にあたる一連のものであり、第三紀末期「鮮新世」に東信一帯に現れた湖盆が佐久地方に分化した湖盆の堆積層とされている。現在では千曲川左岸の八ヶ岳火山列の山麓に見られるものである。

小諸層群の堆積環境は構成層の中に凝灰岩、泥流、火山噴出物を含んでいることから、同時に進行した八ヶ岳火山群の活動の影響を受けている。また、小諸層群の堆積終了後の火山活動の影響も

あって開析は千曲川本流と鹿曲川にとどまり台地を形成している。それゆえ、龍田遺跡のある地点は、繩文期遺跡の見られる一般的地形として高位段丘といった場所でなく、芦田川の氾濫原上に見られるのが龍田遺跡の地理的環境の特徴である。

次に小諸層群の堆積構造について見る。立科町周辺の台地を小諸層群として最終的に言及したのは飯島ほか、(1968) および河内・荒牧(1977) である。

小諸層群の形成要因については第三鮮新中期～後期にかけてかなり急激な構造運動による陥没地帯が生じ堆積盆地が形成されたと解釈されている。小諸層群の基盤はフォッサマグナ地帯に見られる第三紀中新世の内村層とされている。立科町周辺における内村層は丸子町の依田川左岸に見ることができる。

小諸層群は陸上水性層であり、非火山性堆積物のほか溶岩や火山砂岩、凝灰角礫岩、泥流などの火山性堆積物からなる。このため層相の連続性がなく層序の確率が難しく、小諸層群を堆積状況などから内部を更に大きく分類し墨層とされている。以後、火山灰層位学の手法をもって、八ヶ岳固体研究グループにより(1982)、八ヶ岳北麓から北東にかけて小諸層群の層序は確率されている。

小諸層群を構成する墨層は下位より梨平墨層・大杭墨層・布引墨層・瓜生板墨層となっている。立科町周辺の



光徳寺西部に見られる瓜生板墨層の高位段丘
蓼科山火山の泥流堆積物で構成されている

立科町周辺地質図



立科町における地史

時代区分	地史事象	絶対年代 × 10 ³
沖積世	土器時代	10
第四紀	石器時代	150
洪積世	佐久ローム層	新八ヶ岳
	浅間山	古南八ヶ岳
	古北八ヶ岳	-700
第三紀	小諸層群	青木層
	別所層	-2000
	内村層	

地質図を示すと左図のようになる。各層についての概略は次のようである。

- 梨平累層…丸子町梨平、小牧山一帯に見られる。主として礫岩で泥岩や板灰角礫岩等を含み、ブナ、モミ等の化石を含む。層厚約250m。
 - 大杭累層…小諸市大杭から布下にかけて見られる。溶結凝灰岩、礫岩、砂岩などからなる。1989年千曲川近くで、ゾウのキバが発見されている。層厚約350m。
 - 布下累層…布引觀音に見られ、立科町内では藤沢地区希屋川岸に分布する。火碎岩、粗粒砂岩よりなる。水平構造で層厚約150m。
 - 瓜生坂累層…模式地は望月町瓜生坂。台地の上部を構成している。岩相は主に泥流堆積物、シルト、砂、礫からなる。層厚約60m。
 - 佐久ローム層…八ヶ岳東麓から北麓にかけて広く堆積している風成火山灰層で、小諸層群を不整合に覆っている。スコリア・バミスからなり、粘土化が進んでいる。層厚約10m。
 - 蓼科山系統溶岩…角閃石安山岩等からなり蓼科山山麓を構成している。部分的に板状節理が発達し鉄平行を産出している。
- ・文化期……洪積世末期から以後。石器・縄文土器が蓼科山麓で確認されている。この時代では大きい地殻変動は見られない。
- ・侵食期……洪積世末期。立科町周辺では芦川川・番屋川等の侵食が進む。この頃より石器時代に入る。
- ・蓼科山活動期…蓼科山麓に大量の溶岩流が見られる。また、佐久ローム層等の風成火山灰層が堆積する。
- ・段丘形成期…小諸層群堆積後千曲川の下刻作用が進み台地が形成される。それと共に鹿曲川等支流の侵食が進み現地形が作られる。
- ・湖盆形成期…第三紀末鮮新世から第四期紀洪積世初期にかけ佐久地方に湖盆が形成され、小諸層群が堆積する。 (伴野拓也)

第2節 考古学的環境

芦田川左岸の扇状地およびその周辺台地には、多数の遺跡が濃い分布を示し遺跡の宝庫ともいえる状態を示している。本遺跡は、扇状地の中にあって一段上がった微高地に正方形の整った一枚田の水田が展開し、寺跡としては格好の地形を形成していた。

古くから芦田城の西南側の龍田に芦田城主・芦田右衛門光玄が、父光徳の菩提寺を建立したと伝えられていた。そして、光徳寺はたび重なる芦田川の氾濫で流出したと伝承され現在に至ったのである。しかし、今回の発掘調査で寺跡の存在が現実のものとなって私たちの眼前に甦ったのであった。考古学的調査によって、まさに伝承が現実のものとなった好例といえよう。

この光徳寺跡と共に芦田氏館跡が芦田城の北西側に、芦田川をはさんだ両岸に広がっている。ここは、古町下屋敷、中屋敷の字名を中心として、坪の内、王庭、高屋敷、御局屋敷などの地名が残っている。立科町教育委員会発刊「町の地名・史跡・伝説」の中に書かれた一節には、「古町の人家のある所で通称「御屋敷」と呼ばれ、東西120m、南北240mの所を言い、以前は三面に堀の跡があり、南は人台の木があり石刹があった。此の枝を切ればたたりがあると伝えられていた。又刻の井戸・御茶の水、その北側を「坪の内」といい約120mの塁の跡があつて、北の隅には大桜樹、下に小祠、西の方に逆石といって畑中に三つの大石あり、その西の高台を高辛塔婆といった。」と記されているように、以前は土塁の跡も残っていたのである。

この芦田氏館跡には、古町下屋敷Ⅰ遺跡、古町下屋敷Ⅱ遺跡と芦田川右岸に信州林遺跡の3遺跡が含まれる。縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世までの連続した時代の複合遺跡で、一部分が昭和48年に発掘調査されている。縄文時代晩期にあたり佐野Ⅱ式期の土器を中心に、岩偶・土偶・耳飾り・多量の石器類が出土し、概略が長野県史に発表されている。

この他、内耳土器などの中世に連続した土器が出土している遺跡は、No.7の長宝寺庵寺(中世の寺)、No.14中居Ⅰ遺跡、No.18古町中屋敷Ⅰ遺跡、No.20砂原Ⅰ・Ⅱ遺跡、No.22・23光明寺Ⅰ・Ⅱ遺跡、No.27藤塚遺跡、No.28東木ノ宮Ⅰ・Ⅱ遺跡、No.39竹原遺跡、No.47境内派遺跡の計9遺跡がある。また、中世の寺である長宝寺庵寺と共にNo.41の無量寺庵寺は、天台宗に属し長保5年(1051)に比叡山慈心院の僧源信僧によって創建され、勢陀如来を本尊とし、さらに自身で本師慈恵大師の像を刻んで脇本尊としたと伝承されている。また、No.49倉見城跡は永享8年(1436)芦田氏を攻略滅亡させた、高井郡井上一族米持次郎光遠が茂井に入り倉見城を築き、その後、米持氏は芦田に姓を改めている。以上が中世の遺跡であるが、各々は城を中心として大きく分散している。

次に時代別に遺跡をたどってみたい。先ず、縄文時代の遺跡として確認されているのは、21遺跡である。この内、縄文時代のみの単独遺跡は、No.26屋掛遺跡、No.30~33の上弁才Ⅰ・Ⅱ、下弁才、細子遺跡、No.38中弁才、No.46中矢ヶ入の7遺跡があげられる。

弥生時代は、No.5芦田氏館跡、No.7古町屋敷遺跡、No.12、13又旅Ⅰ・Ⅱ遺跡、No.19古町中屋敷Ⅱ遺跡、No.24高井遺跡、No.34大久保遺跡の7遺跡があげられる。

古墳墓は、No.37火ノ雨塚が1基ある。そして、古墳時代~平安時代までの遺跡は、表面採集された遺物が土師器・須恵器のみに分類されているだけなので、古墳時代~奈良時代、あるいは、奈良時代~平安時代の遺跡に分けられるかは現在のところ不明である。No.10の大庭遺跡は平成元年調査した結果、古墳時代~平安時代までの遺構が検出された。また、最近調査した又旅遺跡は、縄文~弥生、古墳~奈良時代にかけての遺跡であることが判明した。こうした事実の確認から、土師器、須恵器の採集されている遺跡は、古墳時代~平安時代までの遺跡と

第1図 地震波分布図 (1 : 10,000)



第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	立地	時代						備考
				縄	弥	古	秦	平	中	
1	難田	大字芦田字難田	扇状地	○		○	○	○	○	
2	光徳寺	大字芦山字高徳寺	台地							近世
3	霊科神社裏宮	大字芦田字高井	台地				○	○		
4	芦田城跡	大字芦田字占町丁西平	山頂			○	○	○		西平遺跡含む
5	芦田氏館跡	大字芦田字古町中・下屋敷	扇状地	○	○	○	○	○	○	占町下屋敷I・II・俗州林含む
6	立石I・II	大字芦山字立石	平地			○	○			
7	長宝寺・古町屋敷	大字芦田字古町屋敷	台地	○	○	○	○	○	○	
8	占堂下	大字芦田字占堂下	台地	○		○	○			
9	古京北下	大字芦田字古京北下	台地	○		○	○			
10	大庭	大字芦田字大庭・下大庭	扇状地	○		○	○	○		平成元年調査、一部復原
11	中居II	大字芦田字中居	扇状地			○	○			
12	又族II	大字芦田字又族	台地	○	○	○	○			
13	火族I	大字芦田字又族	台地	○	○	○	○			
14	中居I	大字芦田字中居	平地			○	○	○		
15	伊勢裏	大字芦田字伊勢裏	台地		○	○	○			
16	古堂義I・II	大字芦山字古御堂義	台地		○	○	○			
17	中町南屋敷添	大字芦田字中町南屋敷添	台地		○	○	○			
18	古町中屋敷I	大字芦田字古町中屋敷	平地	○		○	○	○		
19	古町中屋敷II	大字芦田字古町中屋敷	平地	○	○	○	○	○		
20	砂原I・II	大字芦田字林の上	段丘		○	○	○	○		
21	古町西屋敷	大字芦田字古町西屋敷	台地			○	○			
22	光明寺I	大字芦田字光明寺	台地	○		○	○	○		
23	光明寺II	大字芦山字光明寺	台地	○		○	○	○		
24	高井	大字芦田字高井	台地	○	○	○	○	○		
25	姥・懷屋敷II	大字芦田字姥・懷屋敷	台地		○	○	○			
26	原掛	大字茂田井字原掛	台地	○						
27	藤塚	大字茂田井字藤塚	台地					○		
28	木ノ宮・東木ノ宮I・II	大字茂田井字木ノ宮・東木ノ宮	台地			○	○	○		
29	馬場池下	大字茂田井字馬場池下	台地		○	○	○			
30	上弁才II	大字茂田井字上弁才	台地	○						
31	上弁才I	大字茂田井字上弁才	台地	○						
32	下弁才	大字茂田井字下弁才	台地	○						
33	蘭子	大字茂田井字蘭子	台地	○						
34	大久保	大字茂田井字大久保	台地	○	○	○	○			
35	東大久保	大字茂山井字東大久保	台地		○	○	○			
36	上飯名田	大字茂田井字上飯名田	台地		○	○				
37	火ノ浦塚	大字茂田井字上飯名田	台地		○					古墳

番号	遺跡名	所在地	立地	時代					備考
				縄	古	奈	平	中	
38	中舟才	大字茂田井字中舟才	台地	○					
39	竹原	大字茂田井字竹原	台地		○	○	○		
40	五輪塚	大字茂田井字五輪塚	扇状地		○	○	○		
41	無量寺南寺	大字茂田井字無量寺	扇状地					○	
42	無量寺Ⅰ	大字茂田井字無量寺	扇状地		○	○			
43	無量寺Ⅱ	大字茂田井字無量寺	扇状地		○	○			
44	中島	大字茂田井字中島	台地		○	○			
45	下矢ヶ入	大字茂田井字下矢ヶ入	扇状地		○	○			
46	中矢ヶ入	大字茂田井字中矢ヶ入	台地	○					
47	境内塚	大字茂田井字境内塚	平地			○	○	○	
48	寺上	大字茂田井字寺上	台地		○	○			
49	倉見城跡	大字茂田井字倉見城	山頂					○	

して広範囲の時代の幅を持ってとらえた。

周辺遺跡は、古墳時代～平安時代にはその数が急増し、計35遺跡の分布があげられる。氾濫原の中に所在する大庭遺跡は、繩文・古墳～平安時代までの複合遺跡である。調査前には想像できなかった各時代の遺構が検出されているように、地形的に条件の悪い所と考えていた場所でさえこのように濃密な住居址の存在が顕現している。人口の増加と共に付近一帯は集落を営む好条件が備わっていたと考えられる。

古墳～平安時代のみ集落が形成された遺跡は、No.6立石I・II遺跡、No.11中居II遺跡、No.14中居I遺跡、No.15伊勢裏遺跡、No.16古堂裏I・II遺跡、No.17中町南丘敷添遺跡、No.20砂原I・II遺跡、No.21古町西脇敷添遺跡、No.25蛇ヶ腹屋敷遺跡、No.28木ノ宮・東木ノ宮I・II遺跡、No.29馬場池下遺跡、No.35東大久保遺跡、No.36上飯名田遺跡、No.39竹原遺跡、No.40五輪塚遺跡、No.42・43無量寺I・II遺跡、No.44中島遺跡、No.45下矢ヶ入遺跡、No.47境内塚遺跡、No.48寺上遺跡の計21遺跡が確認されている。このように古墳時代に新しい住居の地を求めて人々は移入してきたのである。そして、平安時代まで集落は存続して営まれている。

さらに、中世の遺跡が9遺跡、城跡が2遺跡、廃寺跡3があり、他地域と比較しても中世の遺跡の多いのにも驚かされる。このように古墳時代～平安時代、そして中世におよぶ各時代の繁栄は立科町の古代～中世における歴史の深さを物語っているといえよう。

また、No.3の蓼科神社里宮は祭神を高皇產靈神とし、蓼科山を御神体としている。これは、古い山岳信仰の原形である。「三代実録、元慶二年七月十六日」の条によると、「信濃國正六位蓼科神、授從五位」と記され、この蓼科神は現在の蓼科神社であろうと推測されている。里宮の創建年月は不明であるが、こうした史料からかなり古いことが想定される。

土の中に眠っている私達の祖先が築き、背々と暮してきたその足跡を文明の利器で一瞬の間に弔り去ることは残念なことである。とかく厄介もの扱いにされがちな埋蔵文化財ではあるが、発掘調査を通して町の歴史の尊さを私たちに語り、教えてくれる貴重な資料である。現在に生きる私達はこれを守り後世に伝えていかなければならぬと考える。

(島田 恵子)

第3節 歴史的環境

古町地区は、古くより開けた所謂旧芦田郷で蓼科山麓の北向きの緩やかな傾斜地にあって、南境峠周辺を湧水源とする芦田川の両岸に位置し、旧中山道（鎌倉街道）の道筋も残る。

東西も南北も約1kmで、北側はやや開けた扇状の地域で、中山道の芦田宿につながり、南側に古戦場の丘がある、東に芦田城址、南西に蓼科神社の里宮と現在の光徳寺が並び、東西南と山に囲まれた盆地がある。

この地には、遠い縄文の時代から人々が住み、大庭遺跡と下屋敷遺跡は、当地方の代表的な遺跡で、他にも遺跡の数は多く、出土品も種々見れるものがある。また、城址や館跡にはそれに因んだ字名や記念物が残り、伝承や古事に習って、現在も住民はその保存と継承に努めている。

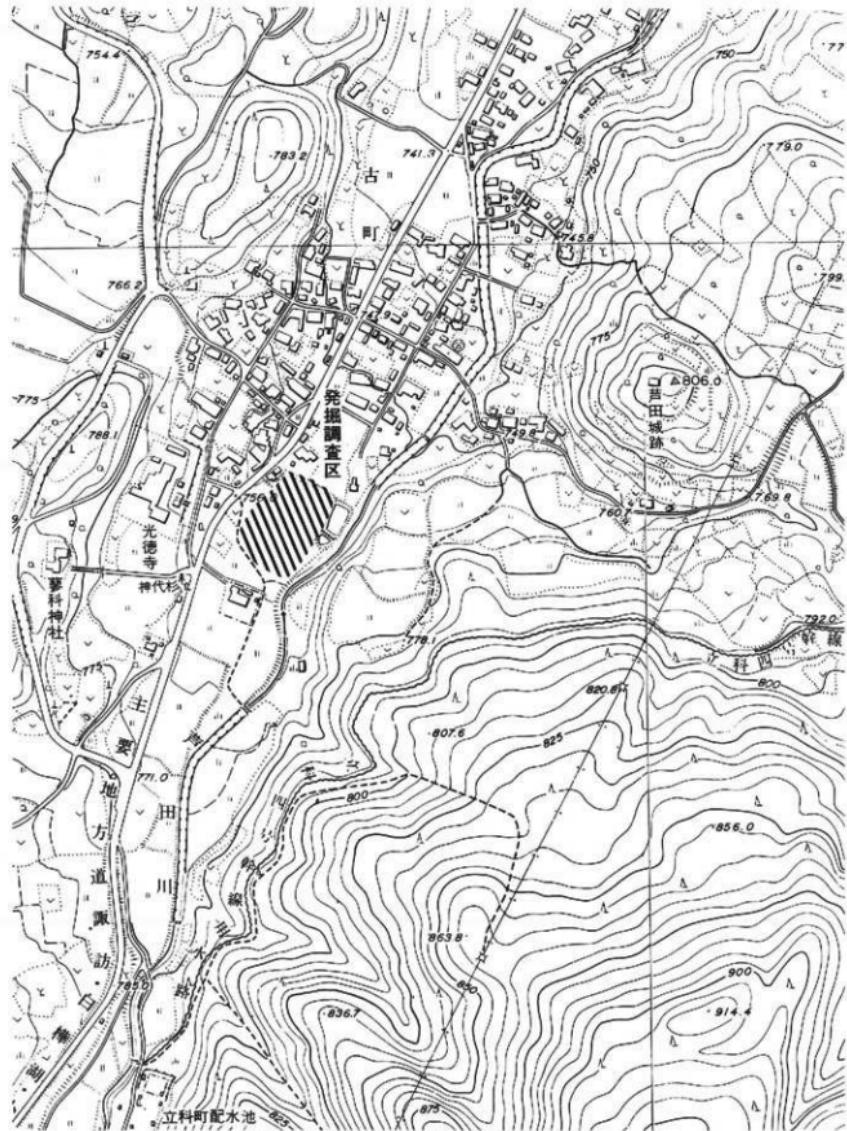
いつの頃からは明らかではないが、律令制の前に東山道が、佐久地方を通っていたと言われている。殊にこの地の南側の南境峠には通過したしとして、幾つかの祭祀遺跡が残されている。また、史籍によれば、平安時代の「日本三代実録」に「元慶2年（878年）9月16日に信濃國正六位上蓼科神に從五位下を授く」とある。

室町時代になると、永享7年（1435年）から滋野系芦田下野守が、ここに城を構えたが、幕府に反抗し、岩村田の大井氏と戦い破れ降伏する。と「満済準后日記」に記されている。滋野系芦田氏に代わり、小県郡の依田の庄から依田氏の主勢がこの地に進出し、芦田と称し栄えた。中でも「備前守光徳」と「常陸介右衛門左衛門」は今にその名を残す。その芦田氏（依田系）の菩提寺（光徳寺）については、資料が数少ない。しかし、今後諸説等を参考にその証を見出しが出来れば後世に継承して行きたい。

（参考）

- 依田氏系譜は三種類あり、統柄が複雑である。
- 依田氏の芦田城築城が、文安2年（1445年）とある。
- 依田氏の菩提寺（光徳寺）の開山時期が宝徳期と文明期の2説ある。
- 光徳の没年は応仁2年（1468年）、光徳の子光玄は文明2年（1479年）没、光玄の子政知は永正6年（1509年）没。
- 本堂と庫裏は解体し藤岡に運ばれた。
- 越前（福井県）の光徳寺は跡に絶江寺と言われている。
- 藤岡の光徳寺の山号は「龍崖山」と書かれている。
- 正徳6年（1716年）は6月まで、改元享保元年となる。
- 法号、法名は出家、受戒の時授けられる。

（中村一朗）



第2図 龍田遺跡地形図及び発掘区設定図 (1 : 5,000)

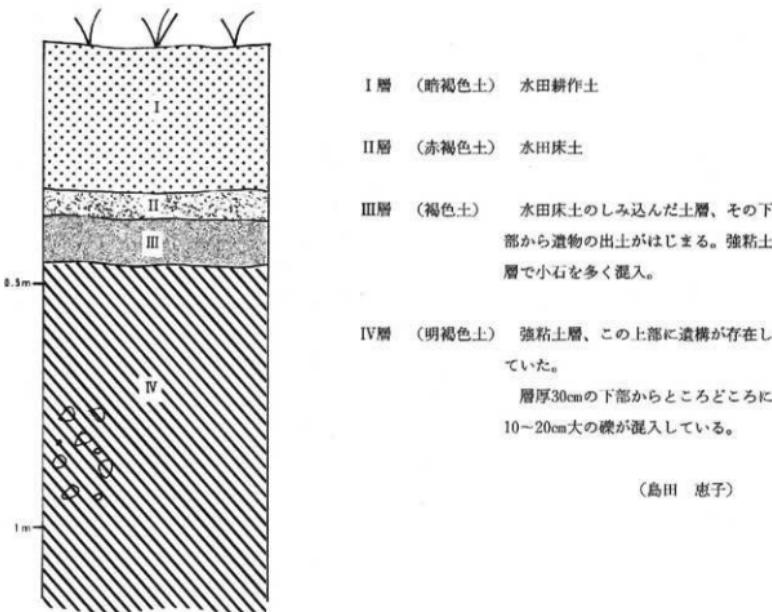
第3章 層序

龍田遺跡は、芦田川の左岸に所在する遺跡である。調査した遺構の所在した場所は芦田川から70m離れた西方の水田にあたり、一枚田の一段高い状態の地形に位置していた。

伝承によると龍田遺跡内に建立された芦田氏の菩提寺(光徳寺)は、芦田川の氾濫で流出したということになっていた。しかし、今回の調査では、焼土や炭化材、数々の遺物が建物址の直上から出土している。大洪水によって流出する程であればこうした遺物は残らないだろうと考えられる。

また、遺構上面には氾濫の痕跡を示す砂礫層は確認できなかったが、覆土中には小さな礫の混入は多かったとおもう。さらに、遺構の範囲確認のためのトレンチ掘りから層序を観察したが、この地区特有の強粘土の中にところによっては10~20cm大の礫の混入が確認された。

図に示した層序模式図は、真冬の積雪の中での調査であったため深掘トレントによる詳細な土層観察には至らなかった。遺構周辺の限られた範囲の層序である。



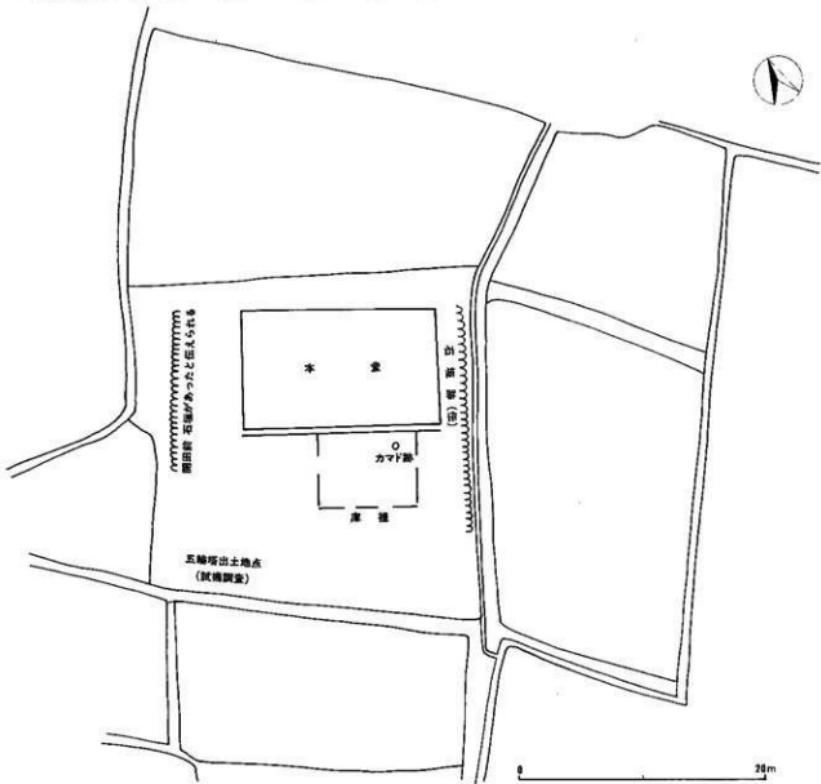
第3図 龍田遺跡層序模式図

第4章 遺構と遺物

1 遺構 (第5図)

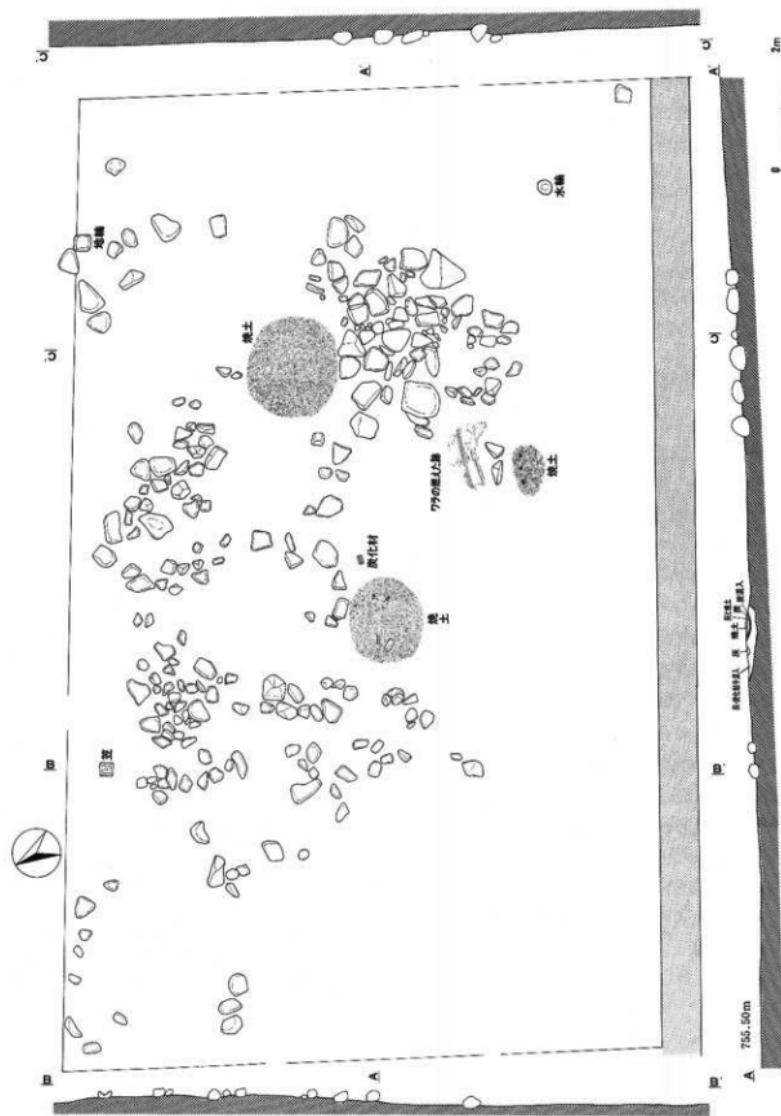
本建物跡は、補場整備工事中炭化材と焼土が出たとしていた状態から、たまたま現地を踏査していた教育委員会の六川孝則係長が不審に思い、筆者へ実見の依頼があった。現場を訪れたのは暮もおし迫った12月26日で、中世に詳しい佐久考古学会員の佐藤敏氏と共に検討した結果、伝承の中にある十五世紀建立の光徳寺の跡ではないかと想定されることから、急拠凍てつく真冬の1月6日から各方面的御理解と協力のもとに調査が実施される運びとなった。

本建物跡は、やや不整ではあるが26mを測る四角形の一枚田の水田に所在している。この水田は全体に一段上



第4図 検出遺構全体図 (1:80)

第5圖 建物付跡測量圖 (1 : 80)



がった微高地を形成しており、龍田と称されている地区の中においては特別な様相を呈した整った地形的環境にあるといえる。

先づ建物址の規模は、長径を測る東西側が16m、短径の南北側が9.3mを計測し、灰色の粘土を敷き始めた南側の細長い直線は幅60cmで、灰色粘土は10cmの厚さに敷かれていた。約8.7間×5間の建物が建立されていたとおもわれ、ここは、本堂にあたると想定される。

焼土・炭化材の残存は3地点に認められた。建物の中央に1.2m×1.4mの範囲にわたって焼土と炭化材が散布しており、この地点は特に炭化材が周囲にも散らばっていた。炭化材は20cm大の長いものが残っていたが、凍みと雪によってかなりくずれてしまったが、原形はもっと大きく多量に遺残していたとおもわれる。第2地点はこの地点から2.4m南東側に位置し、80cm×50cmの範囲に散布していた。さらに、その北側には藁の燃えた痕跡を示す灰の残りが、0.5m×1mの範囲にわたって認められた。屋根材あるいは藁であるかは速断できなかった。第3地点は、第1地点から3m離れた北東側に、1.4m×1.6mの範囲にわたって主に焼土が散布していた。

礫は、安山岩・砂岩・玄武岩などが建物跡の北寄り中心部に、7m×10mの範囲に集中して散乱している。60cm×70cmを最大として、30~40cmが大部分を占めその周囲に10~20cmの小礫が散らばっている。焼土の散布地点には礫はみられない。さらに、こうした礫散布の外側には五輪塔の地輪、水輪および火輪が建物址跡地ぎりぎりの床に転がっていた。礫は、土台を固めるために用いたかのように敷いたように埋め込んだ状態が観察できる。いずれにしても氾濫による流れ込みでなく意図的な集石である。

また、灰色粘土が60cmの幅に直線的に埋め込まれた部分は、建物の外側にあたるため通路に関連した何等かの施設であると考えられる。付近に見当たらない灰色粘土を10cmの厚さに敷きつめているのである。

建物床面のレベルは、東側が15cm程高くなるがほぼ平坦である。また、礫石は全く認められなかった。抜いて除去してしまったという説もある。また、礫石のかわりとなる柱穴の確認は凍てつく地面では精査することが困難であった。

第4回検出遺構全体図に示してあるが、本堂と考えられる建物址の南東側にカマド跡が残っていた。焼土が10cm程堆積し、灰も確認されたがカマドの痕跡と分るのみで破壊されていた。周囲は平坦で礫も少なく、土間と板の間が存在した庫裡の跡ではないかと考えられる。焼土は、建物内に残っていた焼土の状態とは異なり、長い間火床とした状態の焼けこみであり、一見してカマド跡と理解できた。

また、建物址の東西両側には石垣があり、開田の折に除去したという。筆者は関係していないが、平成2年秋に実施した試掘調査の折に、多量の五輪塔の各部位が出土した地点がある。建物跡から10m南西側に寄ったところという。調査時点の詳細な記録が残されていないのでその状況は不明であるが、貴重な資料であるため今回の報告書で実測図に示した。

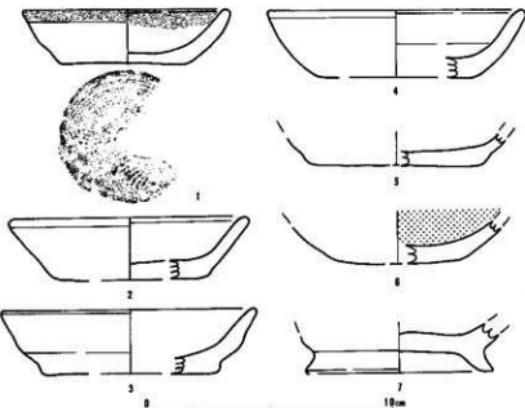
2 遺 物

(1) 土師質皿形土器他(第6~7図)

第6図1~5に示した土師質小皿は、この他に破片が6点出土している。1は、灯明皿に使用したことを示すように内側口縁部に多量の油煤が付着している。油煤は外面にもおよんでいる。底部は回転糸切りで、口縁に向ってやや内湾しながら立ち上がっている。出土した小皿の中では最小である。器肉は厚い。



庫裡カマド跡と考えられる焼土



第6図 土師質小皿他実測図 (1 : 2)

2は、底部糸切りで口縁部に向って直線的に開いて立ち上がっている。1より一まわり大ぶりとなる。

3は、2よりさらに一まわり大ぶりとなる。底部糸切りで、底部と口辺の境に大きいくえぐりを入れ中央でややふくらんで口縁に至る。口縁端部はやや尖った状態である。器肉厚い。

4は、1と同様の器形で、底部糸切りで口縁に向ってやや内済しながら立ち上がっている。器肉は厚い。

5は、回転糸切り痕の残った底部へ口辺下にかけての細片である。

6は、内面黒色の土師器坏である。底部糸切りで内黒の面にはうすい暗文が認められる。

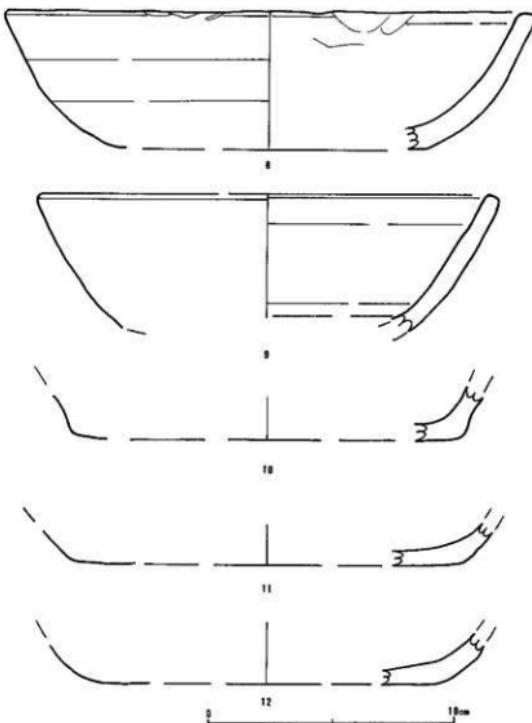
7は、須恵器焼台部の破片である。台部は外傾している。

第7図 8～12は土師質皿の中では大型の部類に属するものである。5点を図示したが、これに該当する破片は29点あり、その内底部片が15点を数える。底部は真平で糸切りではない。

8は、底部から湾曲して立ち上がっている。口縁端部は平であるがところどころ指痕が残ってゆがみがある。器肉厚く、焼成は固い。

9は、底部から直線的に開いて口縁へと立ち上がっている。8と同様に口縁端部は平である。長石、石英が胎土に多く混入している。

10～12は、底部へ口辺下部の破片である。底部の器肉は口辺より薄くなる。3点共に焼成は固い。



第7図 土師質大皿実測図 (1 : 2)

第2表 土師質皿形一覧表

法量上段口径、中段器高、下段底径

器物番号	器種	法量	器形の特徴	調整(外側)	調整(内側)	色調	備考
6-1	土師質小皿	8.5 2.2 5.0	底部から内湾気味に立ち上がる。 器肉厚い。	ロクロ底、油焼は縁部に付着、底邊余切り。	ロクロ底、油焼全体に広がっているが特に縁に多い。	黒褐色	焼成固い
6-2	土師質小皿	(9.9) 2.0 (6.3)	底部から直線的に開いて立ち上がる。 器肉薄い。	摩滅著しい。 底部余切り。	摩滅著しい。 油焼一部にうすく付着。	赤褐色	焼成固い
6-3	土師質小皿	(10.5) 2.2 (7.2)	底部から大きな腰を残す。 口縁端部尖る。器肉厚い。	ロクロ底、底邊余切り。	ミコナダ。	赤褐色	焼成固い
6-4	土師質小皿	(10.6) 2.3 (6.3)	底部からやや内湾気味に立ち上がる。 器肉厚い。	ロクロ底、 底部余切り。	ロクロ底。	赤褐色	焼成固い
6-5	土師質小皿	— (7.0)	底部真平で底径広い。 器肉うすい。	底部余切り。	油焼一部にうすく付着。	茶褐色	
6-6	土師器环	— (5.0)		底部余切り。	内面褐色 うすい輪文ある	褐色	
6-7	須恵器 碗	— (7.7)	台部外傾している。	高台の貼り付け部分、乱雑な輪文。	ロクロ底。	灰色	
7-8	土師質大皿	(21.8) (5.7) (13.0)	底部から湾曲して立ち上がる。 口縁端部平口縁、一部指痕残る。	ロクロヨコナダ。 指痕のゆがみが多い。	ミコナダ。 指痕のゆがみが縁部に多い。	こげ茶色	焼成固い
7-9	土師質大皿	(19.0) (6.0) (11.0)	底部から直線的に開いて立ち上がる。	摩滅のため調整不明。	摩滅のため調整不明。	茶褐色	焼成固い
7-10	土師質大皿	— (16.0)	底径広く平である。	摩滅のため調整不明。	摩滅のため調整不明。	こげ茶色	焼成固い
7-11	土師質大皿	— (16.0)	底径広く真平である。	摩滅のため調整不明。	ロクロヨコナダ。	褐色	焼成固い
7-12	土師質大皿	— (14.0)	底径広く真平である。	摩滅のため調整不明。	ロクロヨコナダ。	こげ茶色	焼成固い

(2) 内耳土器他 (第8図)

1は、口縁端部の細片である。口径21.5cmを測ると想定され、口縁端部は平である。口縁部は直立気味となる。ロクロ調整痕が顯著で焼成は固い。器肉はややうすい。内耳があったかは不明である。

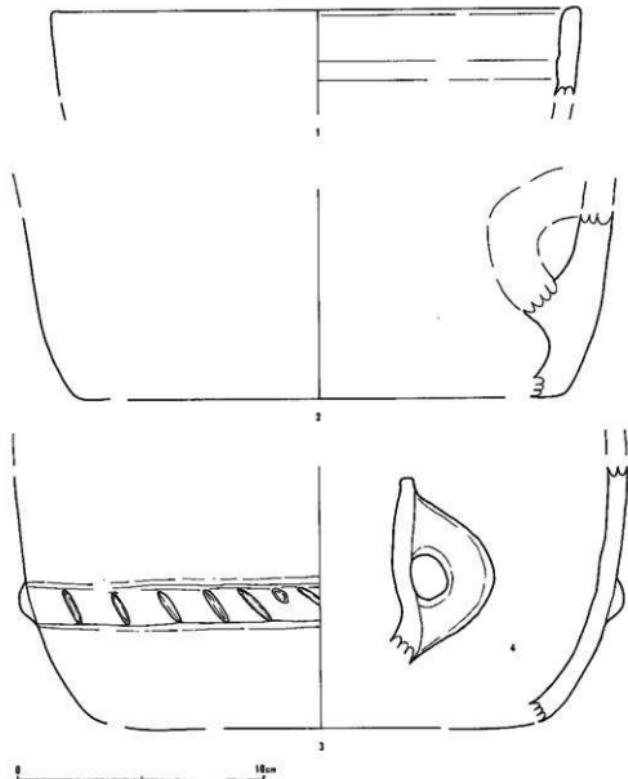
2は、内耳土器の底部から胴下にかけての破片である。器肉厚くがっちりしているが、内耳の直下2cm下に底部があり、耳がかなり底部に近い位置に付着している。ほうろくであろう。

3は、幅1.5cmの隆帯が巡り、隆帯には斜めの刺突文が刻まれている。一見して縄文時代後期の土器片と思うが、胎土、調整、焼成の固さ、摩滅の状況から判断して新しいものと感じられる。ほうろくの部類に加えた。

4は内耳の破片である。耳の裏側にお焦げが付着し器面全体が真黒くなっている。反面耳の部分は変色はあるでない。また、耳直下からのカーブはどう見ても外側に耳が付いているとしか考えられない状態である。細片なので詳細は分からぬ。

(3) 陶器 (第9図~10図)

陶器類は、瀬戸・美濃系を中心に30点の出土があった。全て破片であるがその内、16世紀に位置付けられるもの4点、17~18世紀代のもの4点を図示した。1・2は、口縁端部で外反する端反皿で16世紀前半にあたる製品である。3は、丸皿で16世紀中頃の製品である。4は筒形香炉の口縁部で内面は口縁直下まで施釉されているの



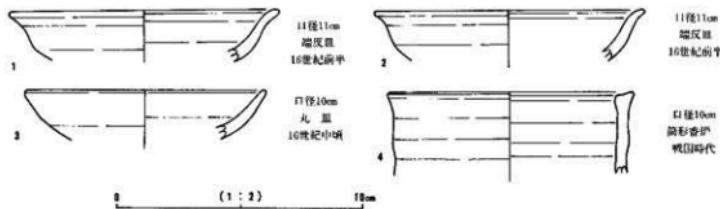
第8図 内耳土器他実測図 (1 : 2)

第3表 内耳土器他一覧表

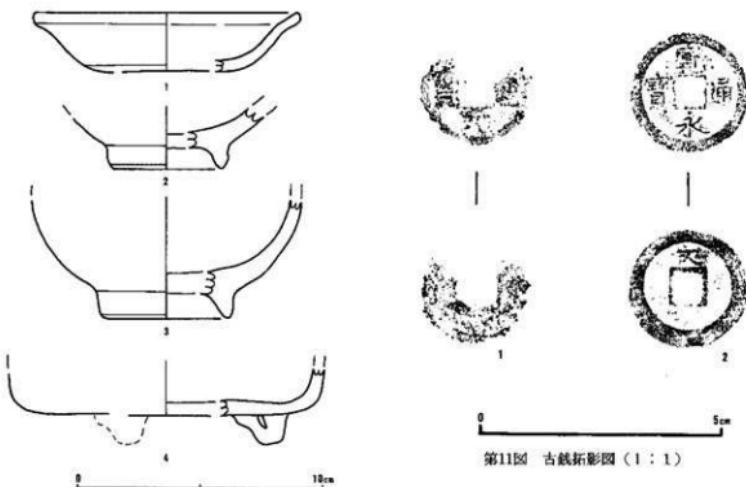
種類 番号	器種	法量	器形の特徴	調整(外側)	調整(内面)	色調	備考
- 1	土鍋	(21.8) —	平口縁を有し、直立して立ち上がる。器肉うすい。	ロクロヨコナヂ。	ロクロヨコナヂ。	灰褐色(外) 明褐色(内)	焼成度い
- 2	はうろく	— (20.0)	内耳底下に底部ある。 器肉厚い。	摩滅のため調整不明。	摩滅のため調整不明。	こげ茶色(外) 赤褐色(内)	焼成度い
- 3	はうろく	— (18.0)	西曲して胴部に平ら。胴部に1.5cm 幅の隆起ある。	ヘラケズリ。	ロクロヨコナヂ。 一部墨付着。	赤褐色	焼成度い
- 4	(耳)	— —	平口縁、耳の外側に謀とおこげ ペッタリ付着。	摩滅のため調整不明。	摩滅のため調整不明。	赤褐色 黒色	焼成度い

みである。16世紀代の中世陶器は計7点の出土で全て瀬戸・美濃系の製品である。

第10図1~4は、瀬戸・美濃系の近世陶器である。1は、輪削皿で17世紀後半の製品である。2~3は丸碗で



第9図 濑戸・美濃系中世陶器実測図



第10図 濑戸・美濃系近世陶器実測図 (1:2)

中信地方に出土が多いという。立科町は兩境峠を越えて中信地方との交流が容易であることが起因していると考えられる。18世紀後半の製品である。4は、志野焼の向付三足盤である。灰釉は外側の底部と足には施釉されていない。17世紀の製品である。この他、鐵軸の溜鉢、伊万里焼の神腰形香炉、肥前産の碗などが出土していると共に18世紀代の製品である。

(4) 古銭 (第11図)

古銭は3点出土したが、小破片のため2点のみ拓影が可能であった。1は上部が割れているため銭名がはっきりしない。○元とつく銭名はかなり多く、開元通宝(発行年621年)をはじめとして、乳元重宝、漢元通宝、周元通宝、宋元通宝、慶元通宝などがある。この他にも時計まわりに銭名を記したものがあり、元の字が真下にある古銭も、淳化元宝、祥符元宝など計40種類がある。

2は、寛永通宝である。細字であることと、宝の字の貝がハ宝であることから新寛永であることが明確にわかる。新寛永は、寛永8年(1668)に再重なる江戸の大火で錢が不足し、江戸城お入りの商人に江戸鬼戸で鑄錢

第11図 古銭拓影図 (1:1)

第4表 古銭一覧表

辨別番号	銭名 (字体)	初鋳年(西暦)	時代	法量		背文	備考
				直径	重さ		
1	○元通宣真書	—	—	2.2	—	—	上部破片のため銭名不明
-2	寛永通宣真書	寛永3年(1626)初 寛永13年(1636)幕府	江戸	2.4	1.80g	文	新寛永(亀戸城)

することを命じ、寛の字の裏面に「文」の字を入れて寛文とし、新銭であることの目印としたのである。いつか文銭とよばれるようになった。また、新寛永の背文は文のほかに、十、小、川、仙、千、久、久二、ト、足、佐、元、一、長の14種類がある。本遺跡出土の新寛永は、「文」であることから、武藏国江戸亀戸村で铸造されたものである。

(5) 銅製品 (第12図)

銅製品は2点の出土があった。1は、中央が湾曲した筒状を呈し、長さ10.5cm、幅1.8cm、空洞の径が2cm×1.5cmである。板状の銅を木の型のまわりに巻いて作ったらしく、下部に銅板を重ねた部分が残る。両端には折り重ねたふちがあり、これで完形品である。用途は不明である。

2は、長さ4.5cm、幅1.1cm、厚さ0.2cmを測る銅製品で、中央に2.5mmの孔がある。表面の孔のふちに金箔が付着している。おそらく全面に塗られていたとおもわれる。寺に関わる装飾品であったと考えられるが詳細は不明である。

(6) 五輪塔

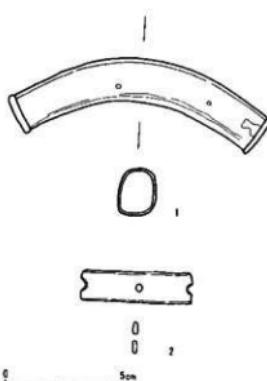
五輪塔は、平安時代後期に出現し江戸時代まで連続して流行した石塔である。当初は密教系の塔として梵字が各輪に刻まれたが、鎌倉時代からは宗派を越えて主に武士層によって建立されている。また、その多くは祖先の供養や墓石とされ、仏教の地水火風空の五大をあらわすものとして、地輪、水輪、火輪、風輪、空輪にそれぞれ分離している。本調査区からは第5図に示してあるように、地輪1、水輪2、火輪2が建物跡の外側寄りに出土している。その他の空風輪、水輪は試掘調査で出土したものである。今回これらの貴重な資料も合わせて記録した。

空風輪 (第13~14図)

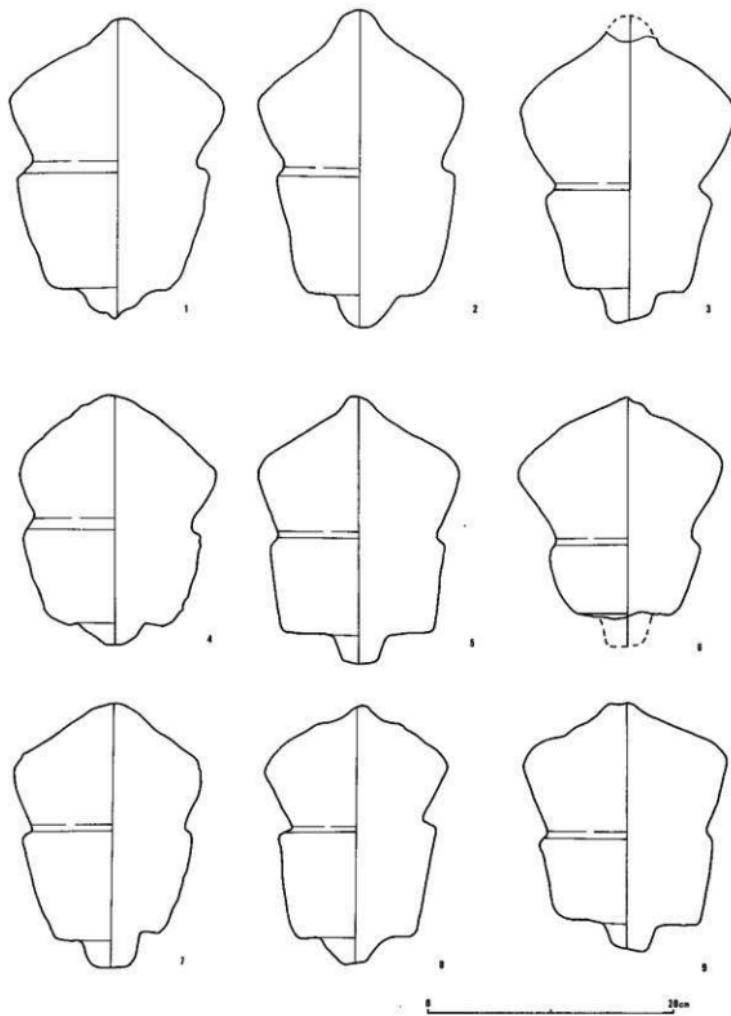
空輪と風輪は1石で造られているのが五輪塔に関しては一般的である。本遺跡出土の15点も全て空風輪は1石で造られている。第13~14図1~11は、形態は同一である。これら形態の特徴をみていきたい。

先ず、空輪の頂点はわずかずつ尖らせているが、摩滅しており中央がややくずれているものが多い。また、頭の両側が張り出して裾ですぼまっている宝珠形がほとんどである。この張り出しが南北朝ごろからあらわれる形態であるが、本遺跡出土の空輪は特に張り出しが強いことが特徴的である。地方色であろうか?

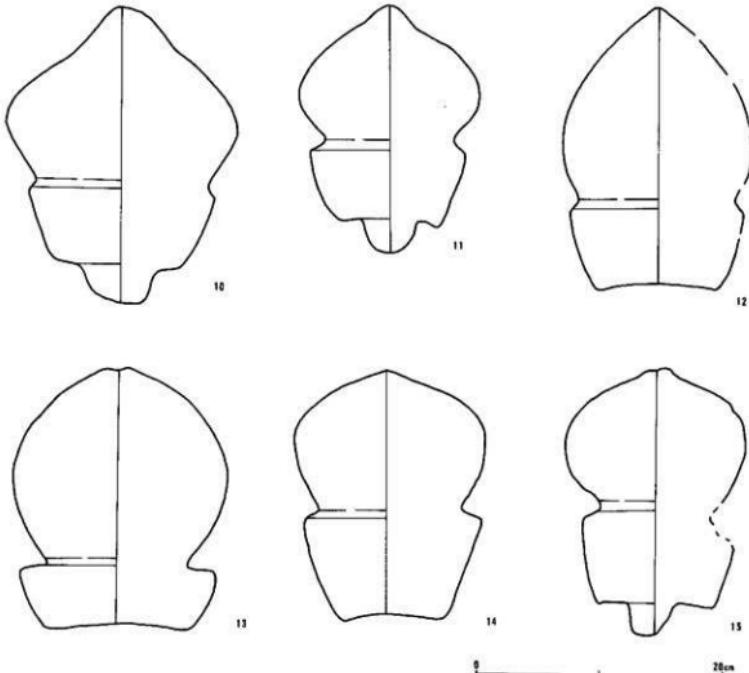
空輪は風輪と1石であるが、普通風輪は半円形の諸花形の形態であるが、本遺跡のものは両側の曲線がやや丸いものは、1、4、6、11にみられる。他は直立気味に開いているため一般的な形態とやや異なる。これも地域的な特色であろうか。火輪との接合となる下部中央の突き出しが、幅4.5cm、長さ2.5cmが大半を占めている。



第12図 銅製品実測図 (1:2)



第13図 五輪塔空・風輪実測図No.1 (1:4)



第14図 五輪塔空・風輪実測図No.2 (1:4)

また、12は半分に割れていたため復原図となったが、頭の張り出しが弱くなり、空輪の全長がやや長くなる。13は、石質が異なる唯一のもので佐久市に多い輝石状の安山岩で造られている。蓮の瓣に似た丸味のある空輪で下部の諸花は短く他のものの半分である。下部中央に火輪との結合のための突き出しがない。

14・15は、頭の両側の張り出しがやや少なく丸味を帯びているため若干形態に変化があるといえる。また、空輪が短く、風輪がやや長い。

以上が本遺跡出土の空輪・風輪の特徴である。五輪塔の年代を見るにはこの部分が有力な極め手となるようである。地域的な特色を持ちながらも中世の古い様相が伺える。

火輪(第15図)

火輪は3点出土している。1、2共に笠は背が低く、左右のものは短い。また、屋根流れは反りが少なく軒口は厚い。1の軒口は内斜めに切られているが、2は垂直に切られ古い様相を示している。

3の笠は形態が異なる。上面の4隅に突起があり完全な形で残ったのは1隅のみである。突起の内側は弧線が一つで軒との区別がない。さらに、外側はやや斜めに直立している。あまりみられない笠である。

以上が火輪の状況である。火輪は屋根が鋭く軒が厚い。他地区とは逆の形態をとっている。これも地域的な特徴であろうか。今後の課題として他方面の五輪塔と比較検討をしていきたい。

水輪（第16~17図）

水輪は5個出土した。径23~28cmの球形を呈し、断面の高さは11~16cmを測る。

水輪1は、中央に径5.5cm、深さ1.5cmの孔があり、その周囲径16cmの範囲が0.4cm程度の敲打痕でふちどられている。球形状の径は25.5cmを測り、高さは13cmとなる。両側は空輪と同様に中央が張り出して側ですぼまっている。据すぼまりの壺形が一般的であるが本遺跡の水輪は、上下共に同一に近い幅となっているものが多い。

2は、中央が径16.5cmの円形に0.4cmの深さに敲打されている。球形の径は26cmを測り形が整っている。高さは16cmで両側は左側が丸朱をもち、右側が中央でやや張り出している。

3は、中央が径14cmの敲打痕があり、深さ0.5cmのおだやかな凹みが設けられている。球形はややゆがんで24cm×21cmとなる。高さは14cmを測り、両側の出っ張りは1のように急激ではないが中央でふくらんだ状態で出っ張っている。

4は、上部の左右が割れている。中央に径11.5cmの敲打痕になる0.4cmの凹みがつけられている。球形の径は23cmで当初は形の整った円形を呈していたともわれるが、傷ついて摩滅している。高さは11cmで、両側は中央がふくらんだ状態で出っ張っている。

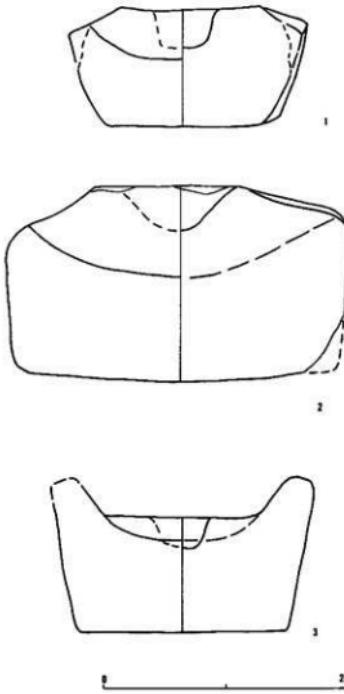
5は、中央の敲打痕による凹みは15×17cmと不整な円形を呈し、1.2cmのやや深い刻みがつけられている。球形は径27×28cmで形の整った円形である。高さは15cmを測り、両側は中央で急激に出っ張っている。1、4と同様の形態であるが、上下の頭と底の両端の切り込みが角ばっている。

以上、本遺跡における水輪の形態を各々あげてみた。形の整った球形を呈し、高さのある2、5の形態と、あまり高くない1、3、4の2種類がある。また、両側の中央が急激に出っ張った1、4、5と丸くふくらんだ2、3がある。

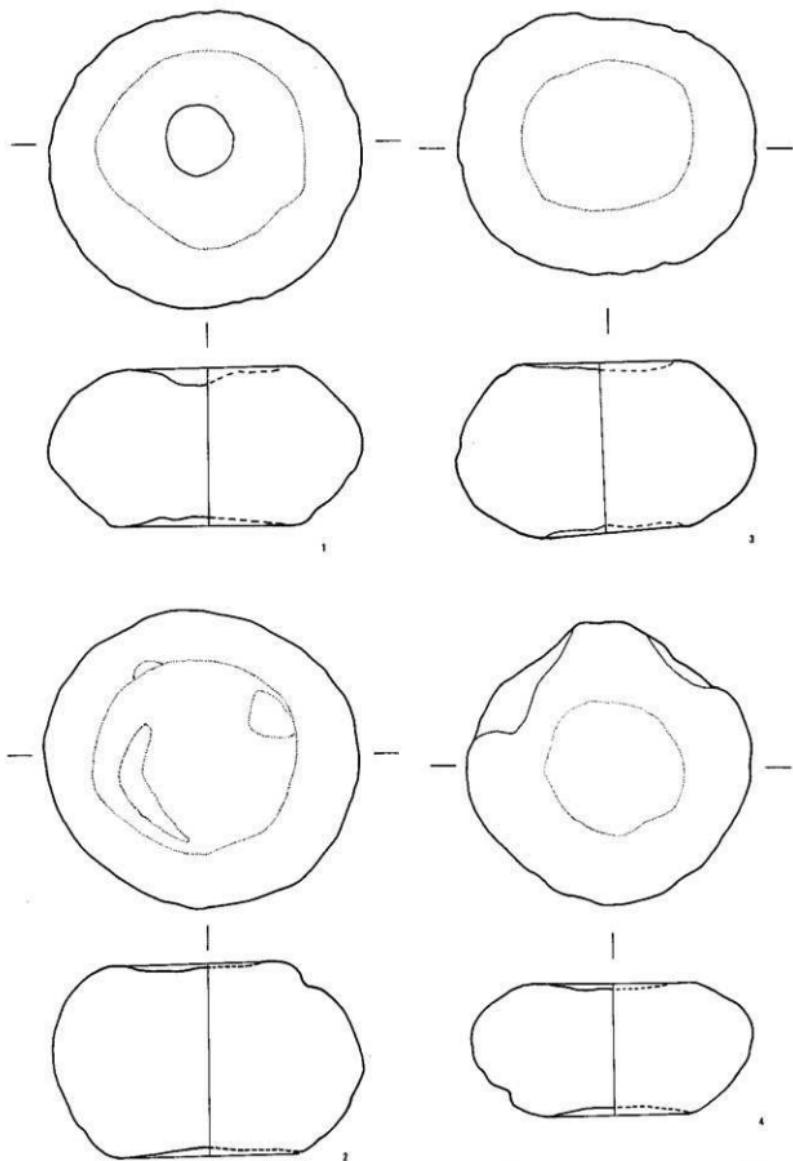
地輪（第16図）

基礎石となる地輪は1点の出土であった。径22cmの四角形を呈し、高さ15cmとなる。地輪は一般的には背の低いものが古いとされているが、安定感や上部の石との組み合わせなどによって高かったり、低かったりすることもあることから地輪の背のみで新旧な決定できないようである。

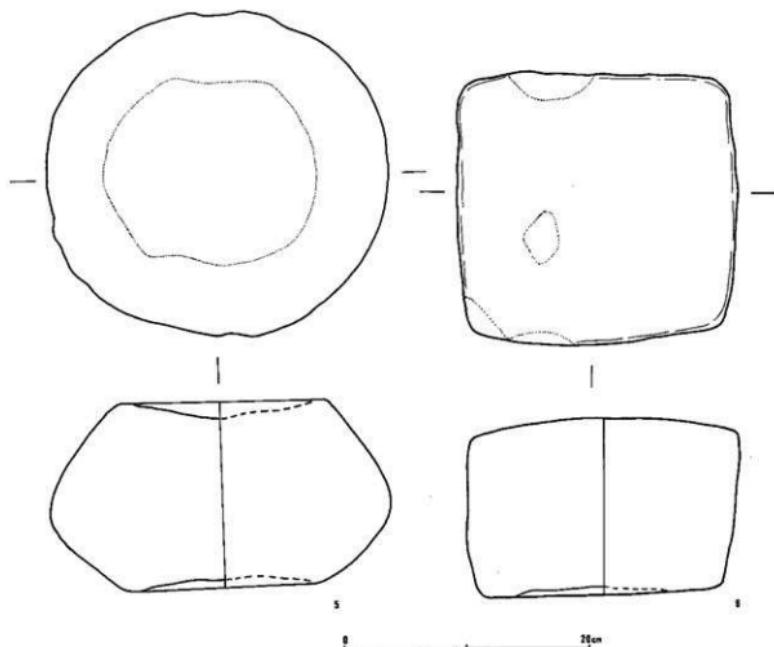
また、地輪の出土数がどこの地域でも少ない。空風輪のように上部にいく程その数は多くなる。基礎石として多方面に利用できるからであろうか。本遺跡においては、空風輪が一番多く次いで水輪が多い。



第15図 五輪塔火輪他実測図 (1:4)



第16図 五輪塔水輪尖測図 (1:4)



第17図 五輪塔水輪・地輪実測図 (1 : 4)

遺物出土状態

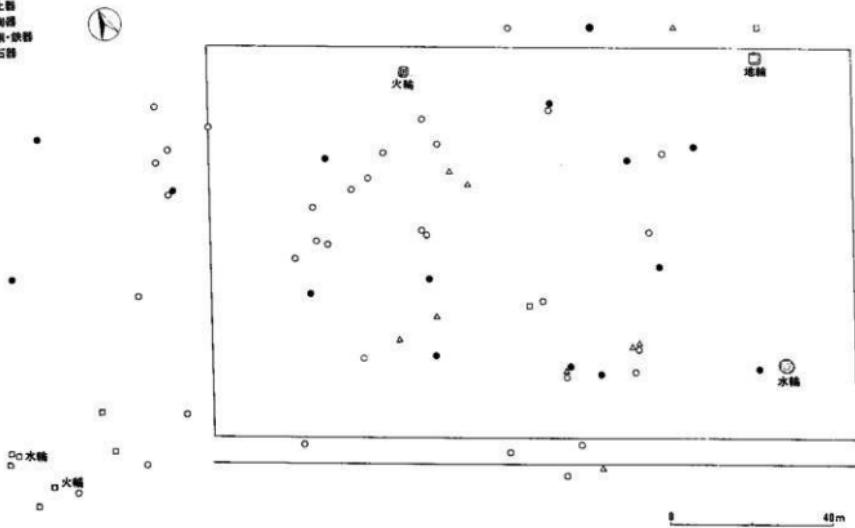
第18図に建物址跡から出土した遺物出土地点を示した。凍てつく土を掘り下げていく過程で土のこごりの中に付着していた遺物は出土地点を記していない。

南東側コーナー寄りに水輪が1点、北東側コーナー寄りに地輪が1点、その地輪と同一線上の西側に並ぶ火輪状1点がそれぞれ建物址内に転げ込むように散らばっている。その他の遺物は建物址の東寄りと西寄りの中央の2箇所に集中している。さらに、建物址の外側である西側の石垣のあったといわれる付近に石器類が集中している。ここからは、水輪と火輪が出土している。さらにこの地点から西南寄り10mから試掘の時に多量の空風輪、水輪が出土したという。

庫裡周辺は、当初補修整備工事中の土が山と積まれていたため、先ず、その裏側に試掘のためのトレンチを入れたが、遺物の出土は皆無であり、この場所に庫裡際の土の山を移動した。庫裡付近の遺物出土は稀薄であった。

こうした状況から遺物は、建物址内とその西南側に集中していることが把握できた。建物址の西側は西垣のあつたとされる場所まで6mの間隔があり、さらにその西南側は大きな広場である。この場所に五輪塔がたくさん建てられていたものと考えられる。芦田氏代々の菩提寺として、この規模の寺は当時においてはかなり立派なものであるといえる。

○ 土器
 ● 銅器
 △ 鉄・鉄器
 □ 石器



第18図 建物址遺物出土地点実測図 (1 : 120)

以上、本遺跡から出土した遺物およびその出土地点をみてきた。ここに示さなかつたがこの他に鐵器が6点程出土している。釘のようなもの、刀子のようなものが見受けられるが、土と石が鐵のまわりに付着して大きな塊となつておひ、きれいに剥ぎ取つたが腐蝕がひどく実測には至らなかつた。

(島田 恵子)

第5章 考 察

伝承の中に存在していた芦田氏の菩提寺である光徳寺が補助整備工事中に発見され、急拠発掘調査の運びとなつた。立科町の発掘調査にたゞさわって以来4年目の暮に、他の試掘調査を行つた折に偶然その現場の踏査を依頼されたのである。炭化材と焼土が散布している間から、土師質小皿・銅製品などが採集できたことと、試掘調査の時点での多量の五輪塔の空・風輪、木輪が出土していることを聞き、さらに伝承の龍田という字名の真直中に所在していることなど、数多くの好条件が重なつたため、まほろしの光徳寺が現実の中に顕現したと判断した。寒中にそして10日毎に降る雪に悩まされながら、光徳寺の跡をなんとか記録にとどめようと情熱をこめて発掘調査にあつた。しかし、凍みと雪によって作業はつらく厳しく、さらにもううような調査に至らなかつたことは非常に残念な思いが残る。だが、関係各方面のあたたかいご理解によって、この光徳寺跡を埋土によって地中に埋めもどすことができたのはせめてもの救いであった。

ここでは、寺跡および出土遺物の特徴を中心にして調査のまとめとしたい。

1 遺 構

光徳寺跡と想定される遺構は、やや不整形ではあるが一辺26mを測る四角形の一畠田の水田の中に所在している。調査当初、雪と凍みた土を削平する作業はきつく、なかなか全容を把握することは困難であった。ようやく全容の把握にたどりついたと思うとうす暗くなり、翌日シートをはぐと霜柱で土が盛り上りひどい状態となつたり、シートの上に雪が積っていたりと冬の発掘調査は厳しい。

そんな時、下の写真に示した灰色の粘土を直線的に埋め込んだ部分が見つかった。幅60cm、延長16mを測り、建物跡に沿っていることが確認できた。調査団はこれを強力な味方として建物跡の全容を検出することができたのである。

建物址は、長径をとる東西側が16m、短径をとる南北側が9.3mを測り、約8.7間×5間の建物が建っていたと考えられる。また、この本堂である建物址の南東側に、カマド址とおもわれる焼土のやけこみが見つかり、周囲の床面の状態から庫裡の存在が想定される。焼土は長い間火床としていたカマドの焚口状態とおもわれる焼けこみであることから判断できた。

建物址内の中央には、1.2m×1.4mの円形状の範囲に焼土・炭化材が散布していた。また、この地点から2.4m南東側に50cm×80cmの範囲にわたって、焼土・炭化材が散布し、この北側には竈の燃えた痕跡が0.5m×1mの範囲に残っていた。さらに、もう1地点北東側に1.4m×1.6mの範囲に焼土が散布していた。焼土・炭化材はこの他にも残っていたとおもわれるが、霜柱と共に盛り上ったり、凍みた土に付着した状態で剥げてしまったところもある。

また、建物址の北寄り方向の中心部には、7m×10mの範囲に縫が地中に埋った状態に集石していた。敷いたような状態も観察できることから、土台を固めるために用いたもので、芦田川の氾濫による流れ込みではなく意図的な集石であるとおもわれる。床面は地形的な関係か



灰色粘土を敷きつめた跡

ら東側が15cm程高くなるが、全体的にはほぼ平坦である。

以上が建物址としての遺構の状況である。光徳寺建立は、応仁2年(1468)10月10日、芦田備前守光徳が没したため、その子右衛門太夫光玄が文明2年(1470)、父供養のために建てた。とするものと、宝徳3年(1451)に建てられた。(「北佐久郡志」)とする開山に関する説が2通りある。これらについては、父光徳が生きていた宝徳3年に父の供養のためにと寺を建てることはないだろう。という説がある。反面、生存中に菩提寺を建てることは一般的である。との説もある。

その後、天正18年(1590)に、信蕃の二男松平右衛門太夫康真は徳川家康に信頼され、藤間に移封されることとなった。その折に菩提寺である光徳寺も解体して藤間に運んで建てたといわれている。運んだのは本堂と庫裡であり、この本堂の柱は移転当時のままの唐松材で黒光りしている。上州では杉・檜が一般的に用いられているが、寒冷地で育った天唐はほとんど使用されていないので、こうした点からも解体して運んだことが立証されている。

調査団では、康真が藤間で居城した芦田城跡と光徳寺を平成4年秋見学に訪れた。光徳寺では住職でいらっしゃる竹市文光氏とその父君から貴重なお話を伺うことができた。筆者らは移転したという本堂の建物の大きさが、発掘調査した建物址と一致することに気が付いた。コンクリートの土間である部分の一間は、(表面)新しく増築したということであり、その部分を除くとほぼ同一の規格である。

伝承では、芦田川の氾濫によって水災にあり、正徳6年(1716)現在地に移したといわれている。立科町の町民の皆さんはこの説が一般的通説となって語られている。しかし、発掘調査によって私たちの前に顕現した光徳寺はなにを語りかけていたのでしょうか?

先ず第一にあげられることは、建物の基礎となる礫石が全て抜かれていたこと、第二に焼土。炭化材が散布していたこと、第三に室町時代に該当する、土器、陶磁器、銅器、五輪塔などの遺物がたくさん出土していることによって、水害にあって建物が流されたことはないと考えられる。水害にあったならば焼土や炭化材はあとかたくなく流されているであろう。また、当初火災にあったことも考えられたが、寺の建物であったならばもっと多量の炭化材と焼土が残っていたとおもわれる。出土遺物、遺構の状態、文献史料、伝承などを総合して、本発掘調査で検出した光徳寺の成りたちを想定すると、中世から江戸時代(16世紀~18世紀)までの遺物が出土していることから、芦田右衛門太夫光玄が文明2年(1470)に父光徳供養のために建立した光徳寺の跡であることは問題ない。さらに、藤間へ解体して移転した後に、七世猪国和尚が故山に帰り再興したと伝えられているが、これについても江戸時代の遺物が出土していることから、中世と同一地点に光徳寺を再興していると考えられる。

しかし、ここで問題となるのは、正徳6年(1711)に、「芦田川の氾濫にあって、水災を蒙り現今地に移し」「北佐久郡誌」とあるが、なぜ五輪塔を移転しなかったか?という疑問は残る。建物址内に転がっていた、火輪、水輪、地輪などと共に、少し離れた地点にバラバラに解体して転がっていた多量の空・風輪と水輪は、室町時代の様式であることから初源の五輪塔であろう。これらについては今後の課題としたい。

2 遺 物

出土遺物は、土師質小皿、大皿、銅製品、陶器、内耳土器、五輪塔、古錢などがある。これらについての詳細は第4章で記述しているので、ここでは、特に中世の色濃い遺物に焦点をしぼった。

建物址内からは、土師器内面黒色坏、須恵器壺など平安時代の遺物、陶器、江戸時代の古錢寛永通宝も混入していたが、土師質小皿、大皿、陶器など中世にわたる遺物も多い。土師質小皿と共に大皿は、口縁部と底部の出土が多かった。口径20cm前後、底径16cm前後、器高5.5cm前後を測る大きさである。佐久市の大井城跡出土の

ものより大ぶりとなり、中世の遺物ではあまり例がみられない。小皿は、油煤の付着したものが完形に近い状態で1点出土している。また、内耳土器は破片であるため詳細は不明であるが、内耳の直下に底部があり寸たらずの器形なのではうろくであるとおもわれる。江戸時代の可能性が高い。

陶器は、16世紀～18世紀の製品が出土している。皿、碗が主であるが、16世紀の筒形香炉の出土は寺跡ならではの貴重な資料である。16世紀代は瀬戸・美濃系のみであるが、17～18世紀は伊万里、肥前系が加わる。

五輪塔は、建物址内から、火輪、水輪、地輪が4点程出土しているが、試掘調査では、空・風輪、火輪、水輪が多量に出土している。この内、時代の決め手となるのは、空・風輪、火輪が最も見分けがつく。

空・風輪は15点の出土があり全て、空・風輪は一石で造られている。本遺跡での空輪の特徴は、先ず頂点はわずかに尖らせてある。次いで頭の両側が張り出して、裾ですぼまっている宝珠形がほとんどである。両側の張り出しが強いことが本遺跡出土の空輪の特徴である。この形態は南北朝ごろからあらわれた。

風輪は、半円形の誇張的形態が一般的であるが、本遺跡では両側の曲線が丸い状態と、直立気味に開いているものとに2大別される。他地域と比較した場合、両側の曲線に丸味が少ない。地域的なものであろうか。全体的に分析すると室町時代の特徴が強い。

火輪は、3点の出土があった。この内1点は形態の異なったもので不明な点が多く、類例を待って検討したい。下の写真に示した火輪は、笠の背が低く、左右のひびが短い。屋根の流れは反りが少なく軒口が厚い。内斜めに切られている。もう1点の火輪はほぼ同様の形態であるが、軒口が垂直に切られている点が異なる。やはり全体的に室町時代の様相を呈している。

水輪は5点の出土である。五輪塔の塔身にあたる球形をした水輪は、両側の中央が張り出しているのが本遺跡の特徴である。張り出しの曲線は優雅で美しい。

地輪は1点の出土である。どこでも地輪は利用価値があるためか出土数が少ない。この1点を元にして下に示した写真のように、本遺跡出土の五輪塔を組み立てて復原してみた。地輪がやや小形であるのが気にかかるが、本遺跡での特徴がよくあらわれた五輪塔である。空輪、水輪共に内側中央が出っ張り、水輪はそろばん珠のような格好をしている。地方色であろうか？石質はほとんど安山岩で占められている。気品ある優雅な曲線の五輪塔を見ていると、遺跡との出会いが偶然とはいえなぜか運命の糸で結ばれているような気がしてくる。もし、あの時六川係長が補場整備の現場へ踏査に行かなかったならば、遺跡は発見されずに破壊されていたであろう。もし、あの時六川係長が筆者達に話してくれなければ、光徳寺は伝承の中だけに終っていたであろう。これらの五輪塔は戦国大名芦田氏の備前守光徳にはじまる代々の供養塔である可能性が高い。芦田氏が筆者らを招いて五輪塔の供養をするよう呼びかけていたのもしれない。光徳寺との出会いは五輪塔と共に立科町の貴重な歴史を私たちの眼前に甦らせてくれたのである。

また銅製品2点が出土しているが飾り金具としての様相があり、寺に関係した遺物であると考えられる。

最後に、本発掘調査、報告書発刊にあたり、教育委員会事務局の方々にお世話になりました。忙しい身であるため、多々ご迷惑をおかけしましたが、発刊までこぎつけられましたことを感謝申し上げます。

（島田 恵子）



本遺跡出土の五輪塔復原の組み立て

第3節 光徳寺と芦田氏

平成4年1月、きびしい寒さの中で、芦田川畔の田園で、光徳寺跡の発掘調査に参加することができた。西には兩境峠に向かう県道を隔てて、石垣と白壁の土塀をめぐらせた現光徳寺が、堂々とした名刹の面影を見せていく。東北方、芦田川の対岸の丘陵上には、光徳寺開基芦田氏の本城、芦田城跡（木の宮城ともいう）が芦田の谷を見おろしている。光徳寺は、戦国四大名芦田氏の菩提寺である。光徳寺と芦田氏との関係について概略を記してみれば、次のような。

芦田氏は、本姓依田氏であるが、そのもとは清和源氏の祖といわれる経基王の子、瀬快流の信濃守為公を祖とする信濃源氏で、その子為央が小県郡依田莊を開拓して、依田氏を称した。〔尊碑分脈〕木曾義仲が依田城によって恭兵し、依（余）田次郎がこれに従った。木曾義仲の滅亡によって、頼朝から依田莊地頭に補された八田氏のもとに、鎌倉時代の依田氏は雄伏を余儀なくされていた。しかし鎌倉幕府滅亡後、南北朝の争乱に、依田氏は足利方に属して、その勢力を伸長してきた。室町幕府将军直轄軍（奉公衆）の中に、村上氏などと共に、依田氏が加えられているのが注目される。さらに南北朝統一後は、依田氏の中には幕府の文官である奉行人に登用され、室町幕府の政治に関与するようになった有力者の名が、「御評定着座次第」「室町幕府重職一覧」などに記されている。依田氏出身、室町幕府奉公人の氏名と在職期間を示せば次のようである。

依田中務大夫入道元義 康永2年(1343)－康永3年(1344) 依田佐衛門尉貞行 康永3年－貞和2年(1346)
依田左近大夫時朝 延文3年(1358)－康暦1年(1379) 依田八郎左衛門尉 康暦2年(1380)－
依田左衛門大夫秀口 応永7年(1400)－応永9年(1402) 依田八郎左衛門尉貞朝 永享4年(1422)－12年(1440)

依田信濃入道亨信 文安1(1444)－享徳1(1452) 依田中務丞秀朝 宝徳1(1449)－
依田主計光朝 文明17(1485)－

信濃小県郡の依田氏以外に、これに該当する依田氏が見当たらないので、室町幕府奉行人の依田氏が、依田庄出身の依田氏であることは、ほぼまちがいないものと思われる。

この在京の依田氏と時を同じくして、在地の依田氏も、源氏と共に南朝方に属した望月氏の衰退に乗じて、箱根峠を越えて佐久郡に進出し、虎御前、外倉を略し、柳沢に善正城を築いて拠点として、牛鹿、山部、芦田一帯を支配下に収め、芦田城を築いて、芦田氏を称した。國衙領と推定されるこの地方を、芦田氏が手中におさめることのできた背景には、室町幕府奉行人依田氏の援助があったことも推測される。しかしこれは、當時、信濃守護小笠原氏の一門として、その守護代を勤めるなどして、佐久郡の大半を占める勢を示していた、大井莊地頭大井持光と正面衝突することになった。大井氏は川西の名族望月氏を倒して、矢島、布施、志津田、茂田井等までその支配下におさめ、さらに岡崎領の現立科町の領域への進出をねらっていた。その進路の真正面に芦田城という櫓を打ちこんだのであるから、両者の衝突は避けられないものとなつた。

当時、將軍職をねらっていた鎌倉公方足利持氏は、將軍足利義教とことごとく対立していた。鎌倉公方持氏の謀叛に設えようとしていた、將軍義教にとって、関東への入りに当たる佐久地方で、最大の有力者である大井と芦田が争っているのは許せなかつた。この両者が和解して、守護小笠原のもとに一致して、関東にあたることが將軍にとって最も望ましかつた。永享7年(1435)2月、將軍義教は、信濃守護小笠原政康に、大井越前守持光と芦田下野守を早く和解させるように命じた。もし從わないときは、美濃・越後の軍勢を差し向けて征伐すると申そえた。しかし、芦田下野守は和議の命令に従わなかつたから、幕府は芦田討伐の方針を決定した。芦田が

おそらく、和睦の条件に芦田城を撤去することを求められて、これを拒否したからであろう。芦田は鎌倉公方足利持氏と結んで、大塔合戦以来の宿敵である、信濃守護小笠原政康と対抗しようとしている北信の村上氏や、滋野家の海野・赤津氏らと結んで、守護小笠原や大井と戦う構えを整えていた。しかし、將軍義教のすばやい決断によって、鎌倉公方持氏が、いったん将軍に屈した。この機をみて守護小笠原政康は、永享8年3月、すかさず赤津に攻め寄せ、芝生田・別府向城を攻め落とした。海野・赤津両氏は本領を踏み荒され、惨敗して降伏し、守護小笠原氏の指揮下に降った。孤立した芦田下野守は連坐して、大井越前守の家臣となり、大井氏の勢力は芦田・牛鹿から、依田庄南部にまで進出するようになった。さいごに残った村上氏も幕府に降伏し、上洛して将軍に陳謝したので、信濃の国人争乱はおさまって、いったん守護小笠原氏のもとに、幕府—守護体制の安定が実現した。

岩村田大井城主大井越前守の家臣になった芦田下野守は、永享12年3月には、清野氏と共に、前鎌倉公方足利持氏の遺児永寿王丸を、結城城に送りこんで、籠城に参加させるという重要な任務を果たしている。永寿王丸は後に鎌倉公方に復帰して足利成氏となつた。五山文学の第一人者といわれた、禅僧李弘大^{りこうたいゆく}叔の日記『薬軒日記』^{じよけんじち}の文明16年(1484)10月23日夜の条に、信濃僧豊知客の談として「大井の執事は芦田殿、相木殿、伴野の執事は鷹野伊豆守(下略)」と記されている。執事は後の家老と同義である。天正2年(1574)渡辺玄忠斎の書いた「佐久大井氏由緒」には、「御家中序敷の次第、一芦田、二番に阿江木、三番に志賀(以下略)」とあり芦田氏が、大井氏家臣中で最も高い地位を占めていたことがわかる。芦田氏は、大井氏の支配下で、芦田城主として、その周辺地域の知行を認められていたものと考えられる。芦田氏の菩提寺光徳寺は、明治5年提出の寺明細帳に、文明2年(1470)芦田光玄が父、光徳の菩提のため建立したと記されている。依田(芦田)氏系図に芦田城主依田(芦田)光徳(忠重)応仁2年(1468)10月10日卒とあるから、芦田下野守が大井持光に降った永享8年(1436)から、32年後のことである。当時光徳が30才とすれば、光徳の没年齢は62才ということになる。芦田光徳と芦田下野守という、二人の芦田城主が同時に存在していたことになる。芦田下野守を滋野氏系芦田氏とする説もあるが、その場合は依田系、滋野系の両芦田氏が、併存していたことになる。また滋野系芦田氏に、当時大井氏と正面から対決できる力があったかどうかかも疑問である。依田氏系譜には光徳(忠重)に関する記述は少ないから、光徳・下野守の同一人説も検討してみる必要がある。

芦田光徳のつぎの忠政(光玄)・政知の二代は上州後閑城主である。(「依田氏系譜」)渡辺玄忠斎の「佐久大井氏由緒」には、大井持光の所領に上州板鼻・後閑を記しているから、大井家臣の芦田氏が五閑城を築いて在住していたものであろう。上後閑の曹洞宗長源寺は、嘉吉3年(1443)後閑城主依田(芦田)政知の開基と伝えている。のちに長源寺四世天英祥貞が、岩村田竜雲寺の復興につとめているのも、大井氏や依田氏の縁故による点があるかも知れない。康正元年(1455)鎌倉公方成氏が古河に敗走した頃から、大井氏の勢力にもかぎりがみえはじめ、文明11年(1479)8月、伴野氏と戦って、大井城主大井政朝が生捕りになるという大敗をしてしまった。文明16年には、この大井氏の衰退に乗じて、北信の村上氏の大軍が侵入してきて、大井城をはじめ神社、仏閣、数千の民家を焼き、大井宗家は村上氏の軍門に降る、という有様で、これにつれて、芦田氏の勢力も激減した。

天文9年(1540)5月、甲斐の武田信虎は大舉して佐久郡に攻めこみ、臼田、入沢の両城をはじめ、數十城を攻め落し、前山城を修築して在陣した。11月には武田信虎は娘^{むすめ}を諏訪頼重の妻として諏訪氏と同盟を結んだ。翌10年5月、武田信虎と諏訪頼重は、村上義清を誘って、海野氏を攻めた。海野棟綱は破れて上野国に逃れ、関東管領上杉憲政に頼った。7月上杉憲政は関東勢3000騎を率いて、小県郡海野に向かってきた。これを迎え討つため、諏訪頼重は小県郡長窪に出陣した。諏訪勢は優勢で、長途の遠征軍である上杉憲政は、芦田郷を攻めちらしただけで、講和を結んで関東へ帰ってしまった。神使御頭之日記には、そのとき、「芦田郷には、主もなき状態であったから、芦田を頼重の知行とし、芦田の子息(信守)は諏訪の家風に従うことを承知したから、芦田郷は、

彼（芦田信守）に治めさせることにして、譲訪頼重は帰陣した」と記されている。信守の生年は不詳であるが、その子信蕃は天正11年（1547）36歳で、岩尾城で戦死しているから、その生年は天文16年（1547）となる。嫡男信蕃の出生を、かりに父信守20歳の時として推算すれば、天正10年（1541）上杉憲政軍の芦田郷侵入時の信守の年齢は14歳で、「葦田の郷にはぬしもなき隣に候間」という神使御頭之日記の記述がうなづける。

しかし、天文11年7月には、武田晴信の急襲によって、譲訪頼重が滅亡し、翌12年には大井城主大井貞隆が、武田晴信のため、長野城に攻められて滅亡したから、芦田城主依田信守は、武田晴信に臣属する以外に存立の道はなかった。そのご武田氏の信州先方衆としての、芦田信守の働きは目ざましかった。天文17年（1548）3月9日「芦田四郎左衛門春日の城再興」4月3日「春日落城、味方勝利」「高白斎記」とあるように、武田氏が春日氏を滅ぼすと、春日城は芦田氏に与えられた。信守21歳の時である。芦田信蕃は天正10年には、要害堅固な春日城によって北条氏の大軍と佐久郡の領有を争うことになる。依田（芦田）氏家譜信守の項には「永禄2年御岳城に移り、藤岡城を領す」とある。御岳城は現埼玉県児玉郡神川町渡瀬村の御岳山（343m）の頂上にある山城で、神流川西岸の平井城（藤岡市）と共に、関東管領上杉憲政の最重要拠点であったが、天文21年、両城とも北条氏康に攻略され、上杉憲政は長尾景虎を頼った。のち永禄12年の武田信玄の小田原城攻の際に、武田軍の攻撃を受けたが、これを撃退した。翌13年に武田軍は、上野から神流川を渡って武藏に侵入して、御岳城を攻め落し、長井致実を城主とした。政実は金證薬師に御岳城攻略のお礼に、植竹村寺田3貫文の地を寄進しているから、芦田信守が永禄2年に御岳城主になったという、家譜には疑問がある。しかし当時、芦田信守が上武闘境に近い武田軍の最前線で、国峰城（甘楽町）の小幡氏らと協力して、上杉（長尾）・北条軍とはげしく対決していたことはたしかであろう。現鬼石町淨法寺は、天文21年2月26日、「淨法寺村内500疋」が鎌倉寺（足利市）に寄進され（長尾景長寄進状「鎌阿寺文書」）、永禄6年には武田信玄との申し合わせで、北条氏から「淨法寺村内500疋」や鬼石村・三波川流域の北谷村が、武田氏に属した安保氏に与えられている（北条氏康・氏政連署知行宛行狀「安保文書」）。このように、淨法寺村が芦田信守の知行地として与えられていたかどうかは疑いがあるが、武田軍の先衆として、芦田氏は、この方面で活動していたのである。永禄2年、信蕃は12歳で、武田氏の人質となって譲訪高島城にいた。永禄7年の芦田・伴野両氏が、石付・根際向郷の界を争ったとき、岩村田普賢堂で行なわれた裁決の「願書控」（佐久市大沢市川五郎氏所蔵文書）には、「芦田氏の知行一万貫」とある。上原筑前御恩候地帳（額戸柳沢義氏所蔵文書）によって推算すれば、当時1万貫の所領は、水田2,500町歩・年貢米7,000石（京引21,000石）となる。これは根際村の年貢120貫に比較すると、その83ヶ村分の年貢に相当することになり、その軍役量は、知行高10貫文に一人の基準量によっても人100人となり、信じがたい面もあるが、佐久郡の地持の中では、伴野氏を越える最大の勢力をもっていたことはたしかであろう。

永禄11年、武田信玄が、今川義元の没後、その子氏真の凡庸なのをみて、駿河國攻略の軍を進めると、芦田信守・信蕃父子はこれに従った。信蕃は既に21歳の新鋭な武将であった。東海道、蒲原郡薩田山に戦い、今川氏真を掛川城に追った。元亀3年（1572）武田信玄の西上にあたっては、信蕃は信玄の旗本に属し、父信守は美濃11から700人を率いて攻め上り、敵将明智宗政を討ちとった。天正2年（1574）～3年は芦田父子が遠州二俣城代を勤めた。その間に天正3年5月には武田勝頼は、長篠の合戦に織田・徳川連合軍に敗れ、甲府に帰った。6月19日、父下野守信守は二俣城で病死した。まだ48才（推定）であった。12月、武田勝頼の直書によって、二俣城を徳川方に明け渡し、信蕃は遠州高天神城に在城した。天正6年5月、越後上杉謙信の跡目相続をめぐり景勝・景虎が争った御館の乱に、信蕃は勝頼に従って出陣し、小田の浜で景勝方を多数討ちとった。天正7年駿河に在陣していた信蕃は、勝頼の命令で、藤枝鬼岩寺分堤の普請を行っている。翌天正8年～10年まで3年間、信蕃は田中城（藤枝市）を守り抜いたが、武田勝頼滅亡が決定的となり、徳川家康の説得によって、城を明け渡して3

月14日、小諸に帰った。しかし、織田信長が信蕃を殺そうとしている、との情報を徳川家康が伝えて、遠州二俣の奥に信蕃をかくまつた。6月、織田信長父子が本能寺で討たれると、徳川家康は直ちに甲斐・信濃二ヶ国支配にのりだし、依田信蕃に佐久郡統一の任務を与えて帰国させた。信蕃が芦田小屋に籠って、甲州に侵入した北条氏政の大軍の兵糧人馬の輸送路をおびやかして、徳川軍を勝利に導き、佐久郡の統一をすすめたことは、『依田記』に詳しく述べられている。

依田信蕃を援助した徳川方の最も有力な部将は大久保忠世である。忠世は徳川家康の重臣で、大久保氏一門の惣領である。信蕃の二俣城も、田中城も、その開城の受取りは、大久保忠世によって行なわれ、部将信蕃の最もよき理解者となつた。信蕃の生命と人物を惜しんで、二俣の奥にかくし、佐久平定の使命を与えることを家康に進言したのも大久保であった。依田の運命は大久保忠世によって開かれたといつてよいだろう。大久保忠世はまた、軍監として柴田康忠を起用し、甲州の津金衆・小尾衆などの在地武士団を先方として、信蕃にそえた。

天正10年11月4日、依田信蕃は柴田康忠と、伴野氏の前山城を攻め落し、芦田小屋を出て前山城へ移った。翌天正11年2月、田口城の相木能登も信蕃の勢に抗しきれず、小田原北条氏を頼って上州に走ったので、残るは岩尾城の大井行吉だけとなつた。2月20日、信蕃は柴田と田口城に上って、佐久平を一望し、残るは小諸と岩尾だけとなつた。明日は岩尾城を攻めつぶしてみせるから、柴田氏は一兵も出さずに見物していただきたいと豪語した。しかし先頭に進んだ信蕃は、弟信幸と共に城兵の狙撃によって戦死してしまつた。信蕃36才であったという。武門の意地を示した大井行吉は、いさぎよく開城して、上州群馬郡保渡田村に去つた。

信蕃戦死の状況は、大久保忠世から家康に伝えられた。信蕃は長男竹福、次男福千代を家康へ人質としていたが、家康はこれを取立て、惣領竹福を元服させ、松平の姓と「康」の一字を与え、松平源十郎康国として、本領佐久郡6万石、加増として駿河で2万石、甲州で2万石、合計10万石の大名となつた。14才の松平康国は、大久保忠世の後見で、小諸城に入つて佐久郡の仕置きをした。大道寺政策は小諸城を明け渡して、本領の上州松井田城に去つた。佐久郡戦国部将のうちで唯一の大名家の誕生であった。

小諸城主松平源十郎依田（芦田）康国は田口城下に、父右衛門佐信蕃の追福のため、曹洞宗大梁山落松院を建立した。法名落松院殿節叟良筠大居士、寺内に信蕃、信幸の墓がある。ちなみに兄弟の父、信守の菩提寺は、佐久郡茂田井の昌林寺であったが、いまは施寺となって跡をとどめない。法名は昌林寺殿月桂良心大居士である。

天正13年、徳川家康が真田昌幸の上田城を攻めるに当たつては、小諸城主依田康国は赤津口で日ざましい働きをして、家康から感状を与えられた。徳川軍は、大久保忠世を真田のおさえとして小諸城にとどめ、伊井兵部少輔が勝間反の砦を修築して、真田のおさえとした。（『信府統記』）天正15年11月、大久保忠勝（忠世の子）の娘が、小諸城主松平康国との妻となつた。譜代、新参の家臣団の統制、郷村支配、寺社領の安堵等、康国の所領支配は順調に進んでいたが、天正18年、豊臣秀吉が、小田原北条征伐の兵を発した。松平康国は相木谷に籠つて、旧領奪還をねらつた伴野刑部・相木能登を討つて、緒戦の勝利を飾つて、関東に出陣し、西牧城を功略、さらに進んで石倉城（前橋市）を降したが、城受けとりの際、変心した彼将のため不慮の死を遂げてしまつた。徳川家康は直ちに弟康真に兄の遺跡を継がせて、一層の戦功を勵ました。

康真是兄康国の追福のため、春日穴小屋城の山下に、曹洞宗金城山康国寺を創建した。法名は康国寺殿嶽岳良雲大居士。小田原戦後の大名配置で、徳川家康の関東移封につれて、松平康真是、武州猿沢、上州藤野2郡で3万石を与えられ、上州藤岡へ移つた。居城芦田城（現藤岡第一小学校地）を築き、芦田村の光徳寺を移して菩提寺とし、諏訪神社を奉斎して鎮守とした。町名にはいまも芦田町、岩村田町（現宮本町）が残つてゐる。岩村田町は岩村田宿の住民が、芦田氏を慕つて移住した地である。平尾平三とその一族も、松平康実に従つて藤岡に移つた。平尾平三守芳の子昌卿は、庚申山丘陵に曹洞宗龜田寺を開基した。旧城域には城屋敷とよばれ、家臣団の屋

数が構えられていた。芦田大明神・諏訪神社・富士浅間神社・光徳寺をはじめ、天竜寺、良信寺、竜源寺、一^{いっ}行^{ぎょう}寺、金光寺、寿楽寺などの社寺は、芦田氏の開基または再興によるものといわれる。芦田氏が藤岡に居城したのは、天正 18 年（1590）築城から、慶長 5 年（1600）城主康真が旗本殺害のため、欠所廃城となるまで、わずか 10 年間であったが、その間に現在の市街地の町並が整えられ、藤岡市発展の基礎がつくられたのである。

光徳寺は、応仁 2 年（1468）に没した父、芦田光徳の菩提のために、その子光玄が、文明 2 年（1470）父の三回忌にあたり、芦田城下の龍田に創建したものと考えられる。光徳の法名は光徳寺殿海叟真儀大居士である。

その子孫、小諸城主松平（芦田）康真是、天正 18 年（1590）上野国藤岡に移封にあたり、芦田の菩提寺、光徳寺の部材を、そっくり藤岡に移して、通幻派の法孫、鷹林伊草を開山とし、龍田山光徳寺を開基して菩提寺とした。現在も光徳寺は創建のままの姿を伝え、寺の柱はカラマツ材で黒色の光沢は、歴史を刻んで、美しく輝いている。上州の寺院建築材はスギやヒノキを主とし、カラマツ材はない。松平康真的故郷芦田を跨りとし、祖先をだいじに思う気持ちがにじんぐるような感概をおぼえる。

芦田村では、光徳寺の藤岡移転後、慶長（1596～1614）の末年、猶国和尚が越前からきて、南岳山光徳寺を旧址に再興して、寺田を設けた。（『旧北佐久郡志』）

本寺（南岳山光徳寺）はもと、芦田城の西南、字龍田にあったが、芦田川の水災を想って、正徳 6 年（1716）いまの地（字光明寺）に移って、龍田山光徳寺と称した。（『信濃宝鑑』『長野県町村誌』芦田村、南岳山光徳寺の項でも、「正徳中水災を避けて、今の地に移し」と書いている。しかし旧『北佐久郡誌』は、「正徳 6 年芦田川の氾濫に会って、水災を蒙り現今地に移った」と記している。

今回の発掘調査は、芦田城の西南、芦田川左岸に近い、字龍田の地で行われたもので、明確な礎石は得られなかったが、実測図が示すように、藤岡の現存する光徳寺とまったく同規模の遺構が確認され、室町時代から近世初期にわたる、陶器類、五輪塔などの石造物も多数発見されていて、光徳寺跡であることはほぼまちがいないものと確認される。なお、水害をうけている跡はみられず、木炭粒や焼土が顕著にみられ、遺物の出土状態からも水害をうけたとは考えられない。

戦国末期の動乱の中で、群雄をおさえて、佐久郡を統一し、近世への道を開いた、芦田氏が信仰のよりどころとした、菩提寺、光徳寺跡が確認できたことは、山城と居館と菩提寺を結んで、中世の佐久の歴史を知る貴重な遺跡としてその活用が期待されるものである。

（井出 正義）

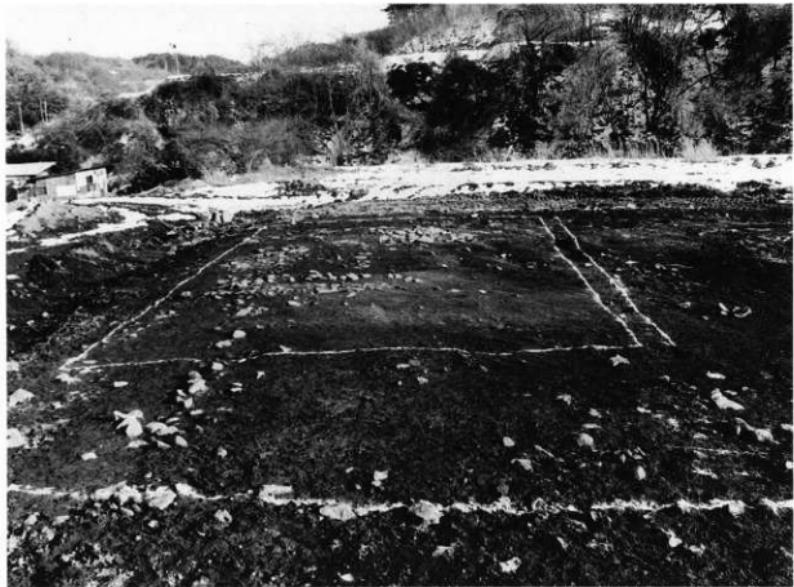


1 龍田道跡北東側に芦田城を望む



2 建物址跡全景（南方より）、手前庫裡跡

図版 2



1 建物址跡全景（西方より）



2 建物址跡全景（東方より）、後方は現光徳寺

図版 3

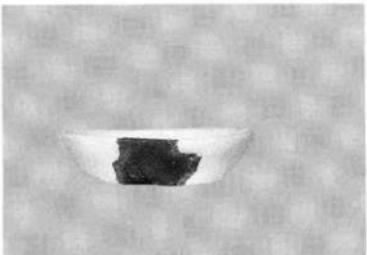


1 五輪塔・銅製品出土状態

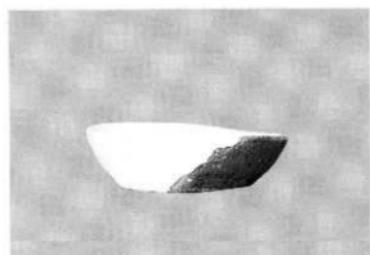
図版 4



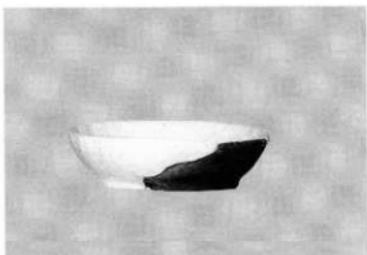
6 - 1



6 - 2



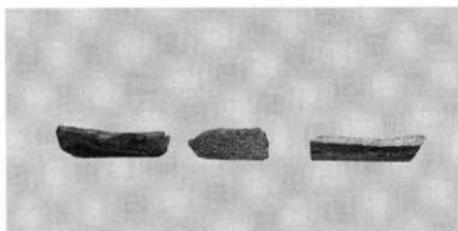
6 - 3



6 - 4



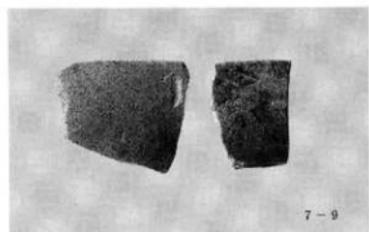
7 - 8



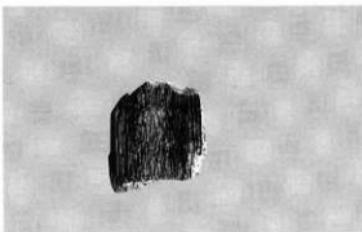
7 - 10

7 - 11

7 - 12



7 - 9

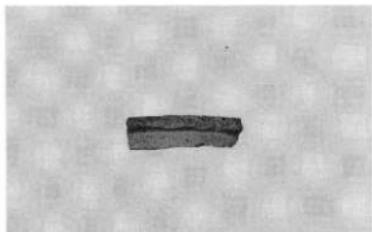


1 土師質小皿・大皿および炭化材

図版 5



6-6



6-7



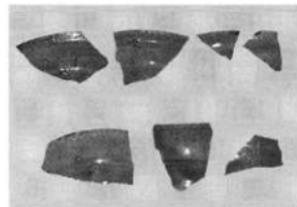
8-2



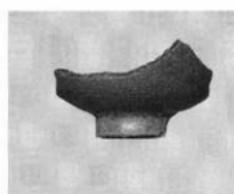
8-4



8-3



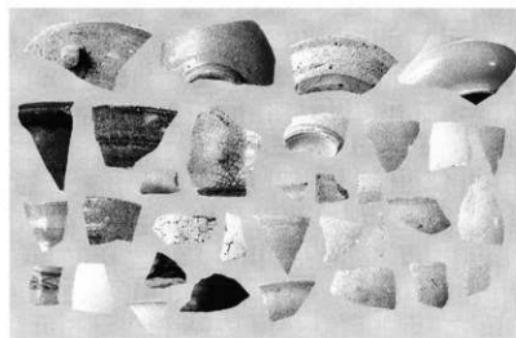
中世陶器 9-1-4



10-3



10-1



1 内面黒色土器・須恵器・内耳土器・中世・近世・陶器類

近世陶器

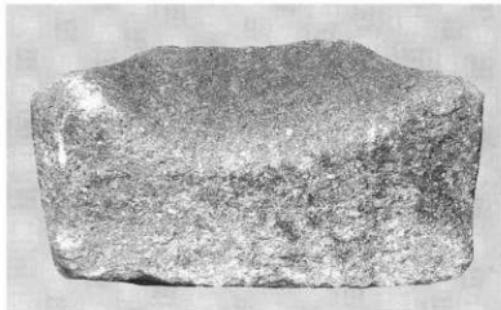


10-4

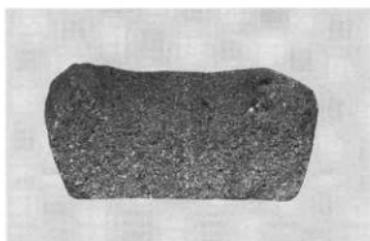


捲腰形香炉

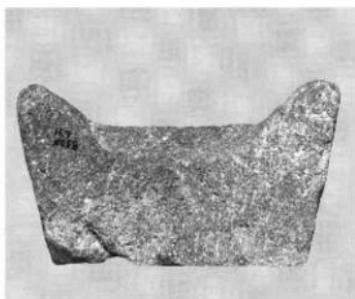
図版 6



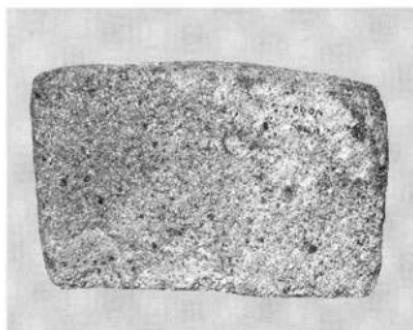
15- 2



15- 1



15- 3



1 五輪塔の火輪・地輪 他

17- 6



図版 7



16-1



13-1



16-4



13-2



16-3



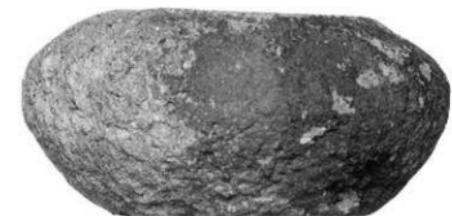
16-2



13-6

1 五輪塔の水輪、空・風輪

図版 8



17-5



14-15



14-14



13-7



13-4



1 五輪塔の水輪、空・風輪

13-5



13-9

図版 9



13-8



14-12



14-11



14-10



13-3



1 五輪塔の空・風輪

14-13



2 鋼 製 品

1 2-1・2

図版10



1 椎岡市の光徳寺
全景



1 藤岡市の光徳寺本堂内



2 天正18年(1590)松平右衛門太夫廉真が上州藤岡に移封された時に居城した芦田城跡現在、小学校が建ち上居が残っているのみである。

図版12

芦田氏代々の法名

光德寺殿 海雲良徳大居士	元治二年正月一日初生
大悲院殿 满月良光大居士	文政元年正月十五日
清涼院殿 考月良勝大居士	文政二年正月十五日
大悲院殿 森輔良玄大居士	文政六年正月十一日
大悲院殿 月桂良信大居士	文政三年正月二十九日
善松院殿 篠岳良第大居士	天保二年正月二十三日
華圓寺殿 嶽岳良容大居士	天保六年正月十七日
總光院殿 抱翠良月大居士	嘉慶二年正月十八日
松栢院殿 通義良圓大居士	天保二年正月十八日
董泰院殿 岩山良光大居士	嘉慶二年正月二十四日
松栢院殿 春山良夢大居士	嘉慶二年正月二十二日
圓成院殿 賢山良聖大居士	嘉慶二年正月二十二日
開山から現在までの歴代僧侶の記録	
七世 猶圓知裕	百七十三年
八世 雲山東次	百六十四年
九世 南英英萬	百七十四年
十世 光山覺徳	百七十五年
十一世 石岩的羊	百七十六年
十三世 不殘釋迦	百四十七年
十三世 機外雷全	百二十七年
十四世 一外存禮	百五十八年
十五世 清壽快泉	九十七年
十六世 霊泉性海	七十一年
十七世 大百忍之	四十一年
十八世 古潤研泉	四十五年
十九世	四十一
藤岡市の光徳寺に記録されている 芦田氏歴代の法名ならびに開山～ 現在までの歴代僧侶の記録	

廿一世 寂守金	三十三年
廿一世 般叢青圓	二十七年
廿一世 月安大祐	四年
廿一世 開基日端	二年
廿一世 大空宗九	二年
廿一世 寂守金	二年
廿一世 天然清空	二年
廿一世 澄洲泰繁	二年
廿一世 澄洲泰運	二年
廿一世 天然清空	二年
廿一世 瑞谷家泉	二年
廿一世 法運文了	二年
廿一世 百空妙心	二年
廿一世 太空大成	二年

立科町文化財報告書第3集

龍田遺跡

発行日 平成6年3月30日
編集者 龍田遺跡発掘調査団
発行者 立科町教育委員会
印刷所 佐久印刷株